

Zoo and Wildlife News

No.55 2022.12



© Kazunari SUDO / Eaglet Office Inc. 2022

ズー・アンド・ワイルドライフニュース No.55

Contents

第 15 回アジア保全医学会に参加して	1
第 28 回日本野生動物医学会大会 開催報告	10
認定専門医協会から	12
各種委員会から	14
学生部会から	15
動物園・水族館から	20
リレー連載	23
現場レポート	27
書籍紹介	31



JAPANESE SOCIETY OF
日本野生動物医学会
ZOO AND WILDLIFE MEDICINE

日本野生動物医学会

Japanese Society of Zoo and Wildlife Medicine

目 的

1. 野生動物および動物園動物に関する動物医学研究の学術交流と発展
2. 野生動物医学の卒前・卒後教育
3. 傷病野生動物診療に関わる臨床および救護技術の交流と発展
4. 野生動物の正しい知識と理解のための一般市民への普及啓発
5. 野生動物医学および野生動物保護に関する国際交流と推進

役 員

会長	大沼 学	((国研)国立環境研究所)[統括]	評議員	大池辰也	(南知多ピーチランド)
副会長	高見一利	(豊橋総合動植物公園)[統括補佐]		大野晃治	(男鹿水族館GAO)
副会長	田島木緒子	(国立科学博物館)[統括補佐]		岡本 実	(酪農学園大学)
顧問	坪田敏男	(北海道大学)[アドバイザー]		落合謙爾	(岩手大学)
	羽山伸一	(日本獣医生命科学大学)[アドバイザー]		川上茂久	(群馬サファリワールド(株))
	岸本真弓	((株)野生動物保護管理事務所関西分室)[アドバイザー]		木戸伸英	(横浜市立金沢動物園)
	須藤明子	((株)イーグレット・オフィス)[アドバイザー]		木村順平	(ソウル国立大学)
事務局長	柳川洋二郎	(北海道大学)[庶務]		鯉江 洋	(日本大学)
理事	和田新平	(日本獣医生命科学大学)[専門医協会]		後藤拓弥	((株)野生動物保護管理事務所)
	齊藤慶輔	(猛禽類医学研究所)[広報]		寫本 樹	(日本獣医生命科学大学)
	浅野 玄	(岐阜大学)[経理・基金担当(基金担当)]		下鶴倫人	(北海道大学)
	佐々木基樹	(帯広畜産大学)[学術・教育]		進藤順治	(北里大学)
	楠田哲士	(岐阜大学)[学会誌編集]		進藤英朗	(下関市立しものせき水族館「海響館」)
	外平友佳理	(SALU)[ニュースレター編集]		鈴木正嗣	(岐阜大学)
	佐藤雪太	(日本大学)[感染症対策]		竹田正人	(宮崎市フェニックス自然動物園)
	岩尾 一	(新潟市水族館)[臨床・普及啓発]		竹鼻一也	((有)市原ぞうの国)
	長嶺 隆	(NPO法人どうぶつたちの病院沖縄)[野生動物保全・福祉]		田中悠介	(仙台うみの杜水族館)
	木下こづえ	(京都大学野生動物研究センター)[国際交流・アジア保全医学会]		チェンバース ジェームズ	(東京大学)
幹事	石井千尋	(猛禽類医学研究所)[庶務・経理・基金担当(経理担当)]		寺沢文男	(新江ノ島水族館)
	植田美弥	(横浜市立金沢動物園)[専門医協会]		中川真梨子	(群馬サファリワールド(株))
	近藤圭佑	((株)海の中道海洋生態科学館)[広報]		中津 賞	(中津動物病院)
	川瀬啓祐	(日立市かみね動物園)[学術・教育]		成島悦雄	((公社)日本動物園水族館協会)
	加藤卓也	(日本獣医生命科学大学)[学会誌編集]		根上泰子	(環境省)
	井上春奈	(わんぱーくこうちアニマルランド)[ニュースレター編集]		伴 和幸	(豊橋総合動植物公園)
	野田亜矢子	(広島市安佐動物公園)[感染症対策]		藤井 啓	(OATアグリオ(株))
	水主川剛賢	(神戸どうぶつ王国(クウ動物病院))[臨床・普及啓発]		松岡由子	(滋賀県立琵琶湖博物館)
	渡邊有希子	(猛禽類医学研究所)[野生動物保全・福祉]		松林 誠	(大阪府立大学)
	藤原摩耶子	(京都大学野生動物研究センター)[国際交流・アジア保全医学会]		松本令己	(兵庫県立コウノトリの郷公園)
監事	石塚真由美	(北海道大学)[監査]		皆川智子	((一財)沖縄美ら島財団)
	山口剛士	(鳥取大学)[監査]		宮下 実	(宇部市ときわ動物園)
評議員	赤木智香子	(ラプター・フォレスト)		向井 猛	(札幌市保健所動物管理センター)
	浅川満彦	(酪農学園大学)		村田浩一	(日本大学)
	石名坂 豪	((公財)知床財団)		森田菜摘	(横浜市立よこはま動物園ズーラシア)
	伊藤圭子	(奄美いんやま動物病院)		森光由樹	(兵庫県立大学)
	伊東隆臣	(海遊館)		柳澤牧央	((株)マリンパレス水族館うみたまご)
	伊藤英之	(京都市動物園)		山上達彦	(長野市茶臼山動物園)
	岩田恵里	(岡山理科大学)		米田久美子	((一財)自然環境研究センター)
	宇根有美	(岡山理科大学)		綿貫宏史朗	(京都大学野生動物研究センター)
	遠藤秀紀	(東京大学総合研究博物館)			

会 員

本会会員は正会員、学生会員、団体会員および賛助会員とする。入会を希望するものは所定の入会申込書に所要事項を記入し、会費を添えて本会事務局に申し込む。会費は以下のとおりである。

正会員：	9,000 円
学生会員：	3,000 円
団体会員：	70,000 円
賛助会員：	一口 30,000 円

COVER PHOTO

イヌワシ (*Aquila chrysaetos*)

撮影：須藤一成 (株)イーグレット・オフィス

本会会員の権利は以下の通りである。

1. 本会発行の学術定期刊行物の受領
2. 本会発行の刊行物への投稿
3. 本会主催の集会への出席と研究発表
4. 総会への出席および本会の運営への参加
5. 本会役員の見学権と被選挙権。ただし、この権利は正会員に限られる。

事務局：北海道大学大学院獣医学研究院

臨床獣医科学分野 繁殖学教室内

Tel・Fax 011-706-5234

E-mail wildmed@vetmed.hokudai.ac.jp



第15回アジア保全医学会（タイ・チェンマイ）に参加して

新井花奈, 斉 恵元, Lim Qiluan, 鈴木瑛之 (京都大学野生動物研究センター)

■学会編

新井花奈, 斉 恵元, Lim Qiluan

第15回アジア保全医学会が2022年10月25日から28日の間、タイのチェンマイで開催されました。チェンマイ大学(CMU)を会場として、さまざまな学生、研究者や獣医師の方々と交流ができ、とてもよい機会でした。26日から28日の3日間にわたるメインの学会に加え、学会前日の25日には両生類・爬虫類病理学やゾウの血管内皮ヘルペスウイルス(EEHV)に関するワークショップもありましたが、これには残念ながら私たちは参加できませんでした。以下、学会に参加した3日間の様子などを報告します。

参加者は主に獣医師や獣医学の学生が多かったのですが、学会の発表自体は生物多様性、保全、福祉や人と動物の軋轢など、幅広くカバーされていました。参加者はみんなフレンドリーで、今後アジア各国を調査地として研究を展開したい人には、さまざまなつながりができる学会だと感じました。

学会1日目(10月26日)

口頭発表は15分ずつのセッションが会場2つで同時に行っていました。また、今年はOnsiteポスターセッションはなく(残念でした...)ハイブリッドで見ることができるOnlineポスター発表が実施されました。

初日は、タイのマヒドン大学(Mahidol University)のDr.

Boripat Sariaroonratによる野生動物保護に対する世界的な影響と回復のために何ができるかについての基調講演(Keynote speaker)から始まり、発表を挟んだコーヒー・お茶ブレイクの後、第1会場(Room 1)で環境や多様性をテーマとした最初の口頭発表が始まりました。野生動物研究センター(WRC)からは博士後期課程3年生(D3)のLimさんが最初のセッションの口頭発表者の一人で、発表前はとても緊張していました。Limさんはその緊張のせいか、同じセッションで発表していた学生や研究者たちの発表を少ししか覚えていないと語っていました(とても大きな会場で初日人も大勢いたため緊張するのはとてもわかります)。この学会でLimさんは初めてマレーバクのホモ接合性解析について発表しました。Limさんは、博士論文発表会の前にここで発表できたことはとてもよい練習の機会であったと言っていました。

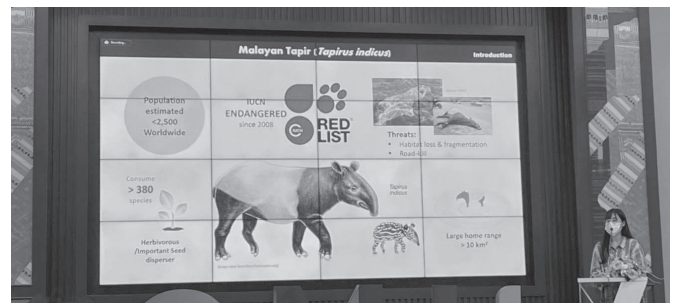


写真2 マレーバクについて口頭発表している博士後期課程3年生のLimさん



写真1 学会のプログラム

その他の発表は、例えば、日本からはゾウのシトクロムP450遺伝子の系統解析や野鳥の肺におけるマイクロプラスチックについての発表、パキスタンからはサンバーにおける藻類の毒性についてなど、保全分野でも内容や対象種がさまざまあり、とても興味深く面白い発表がたくさんありました。

お昼の時間になると準備されたタイ料理のお弁当が配られ、お腹が空いていたのでとても美味しかったです。ご飯が美味すぎて、それに集中してしまい、学会に参加したWRCの学生4人はお弁当の写真を撮るのを忘れてしまいました(3日間食べたお昼のお弁当の写真は1枚もなく、撮ればよかったと今となってすごく後悔しています)。

午後のセッションは、One Healthについてでした。World



写真3 ディナーパーティーでチェンマイの伝統料理を満喫し、伝統舞踊と花火を楽しむ夜

Organisation for Animal Health, Orangutan Veterinary Advisory Group, Indonesia, EcoHealth Alliance, New York などの団体から One Health Program に関する 6 つの講演が行われました。その他、パキスタンにおける野生動物犯罪のオンライン化、インドネシアにおけるウミガメの消費による健康への影響、イルカへのヒト由来の健康診断ツール（ホルモン）の適用などについての講演が行われました。

また、口頭発表は同時進行のため、聞けなかった発表もありましたが、どちらの会場もほぼ満席状態で、きつとどちらもよい議論が行われてたのだろうと感じていました。

学会 1 日目の後のディナーパーティー

100 人以上の参加者がディナーパーティーに参加しました。チェンマイの赤いソンテウに乗って、カルチャーセンターまでたどり着きました。雑談をしながら、タイ北部の伝統料理を楽しみ、伝統舞踊を鑑賞できました。相乗りや相席が多かったので、人見知りの人には少し気まづいかかもしれませんが、タイはワイワイする雰囲気があるので、それほどうまく英語が喋れなくても楽しく過ごせました。

学会 2 日目 (10 月 27 日)

朝 9 時からの基調セッション (Keynote) は One Health についてでした。その後の 15 分ずつの発表は福祉、爬虫類研究、Keynote の繁殖マネジメントを挟んで、流行病学、病理学と繁殖生物学についての発表でした。D2 の齊は福祉セッションに一番興味があったので、ここで面白かった研究を 2 つ紹介します。

まずはスリランカサファリーパークの Priyasad Ediriwarne さ

んの研究です。彼は大型ネコ科の治療やストレス緩和において音楽療法の効果を調べています。彼は獣医師で大型ネコ科と接する中で音楽の効果に気づいたようです。しかし、まだパイロット研究で説得できるデータは出していませんでした。個別に彼に話を聞きに行った際、今後、音楽療法を使用して、病気個体のストレスホルモンのモニタリングなどをしようと考えていると教えてくれました。

また、チェンマイ大学の Ana Belén López Pérez さんの雄ゾウの社会性と福祉についての研究もとても面白かったです。雄ゾウも複数頭で一緒に暮らすことが近年明らかにされましたが、多くの飼育施設は安全のために依然として雄ゾウを単独で飼育してい

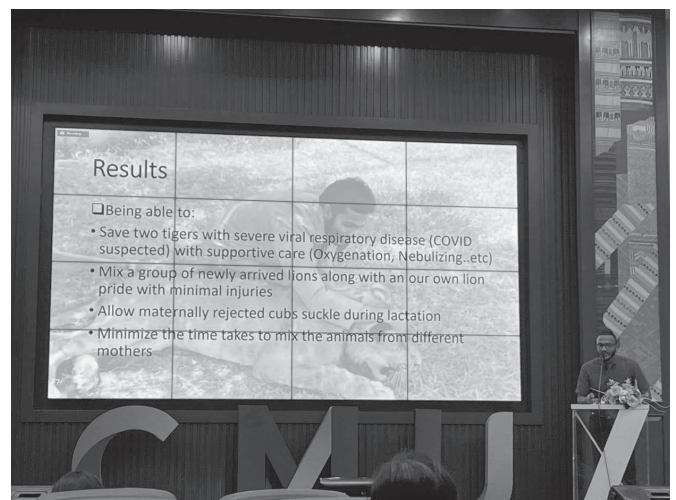


写真4 Priyasad Ediriwarne さん発表のシーン

ます。この研究ではラオスの Elephant Conservation Center にて血縁関係のない雄ゾウと一緒に飼育しました。ゾウ使いの有無にかかわらず、雄ゾウ間に親和的行動が多く見られ、攻撃行動も小さい頻度でしか見られませんでした。「雄ゾウもゾウであり、社会的つながりが必要です。雄同士が会った時、攻撃よりも互いを知りたい行動が多かったです。」という発言はすごく印象に残りました。とてもわかりやすい結果で、飼育下ゾウの福祉には大変貢献できる研究だと思いました。



写真5 Ana Belén López Pérez さん発表のシーン

この日の学会が終わった後、カワウソの研究をしている WRC 修士課程 2 年生 (M2) の鈴木くんの共同研究者の方々がチェンマイ大学近くのナイトマーケット (Chiangmai University Night Market) を案内してくれました。このマーケットは大学生や若者向けの比較的安くおしゃれな服と屋台が沢山ありました。屋台文化が好きな私たちはとても楽しく過ごせました。串やデザートをいっぱい食べて、服や帽子も買いました。



写真6 ナイトマーケット巡り



写真7 ナイトマーケットで食べた美味しい屋台の食べ物

学会3日目 (10月28日)

学会3日目は4人の基調講演者 (keynote speakers) によるヒトと動物の軋轢 (human-animal conflict/interface) についての講演から始まりました。この課題は、動物や環境、保全などを考える中で、世界中で特に重要視されている問題の一つであり、学会最終日の最も重要な講演の一つでした。日本におけるヒトとクマ、シンガポールにおけるヒトとカワウソ、タイにおけるヒトとマカクザル、スリランカにおけるヒトとゾウなど、アジア多国の事例を紹介してくれて、それぞれの国での対策も話してくれました。問題の深刻さや文化・社会の違いによって、この軋轢問題の対策



写真8 スリランカにおけるヒトとゾウの軋轢に関する発表内容の一部



写真9 学会のコーヒー・お茶ブレイクで出てきたタイ伝統のお菓子

は本当にケースバイケースで、とても複雑であり重要な課題であることを再び感じさせられました。

コーヒー・お茶ブレイクではタイの伝統のお菓子などが出てきました。最終日のお菓子（写真9）はタイの伝統的なお菓子で、日本ではなかなか味わえないものです。石鹸の味に似ていると感じる人もいました。日本では馴染みのない味のため、ちょっぴり苦手な人が多いかもしれませんがM2の新井さんは好きでした。

その後は最後の口頭発表会が行われました。Room1とRoom2に別れ、それぞれ興味のある発表を聞きに行きました。Room1は海生哺乳類の発表が主に行われ、Room2では動物における臨床医学の発表が行われました。学会最終日も、二つのセッションの発表内容が面白く、どっちの部屋に行くのかすごく迷いました。今回の学会は録画されているようなので、見れなかった発表も後日見たいと思います。



写真10 いただいた緑色のバック

すべての発表が終了した後、口頭発表賞とポスター発表賞が発表されました。口頭発表から3名、ポスター発表から3名。野生動物研究センターからはM2の新井さんがポスター優秀賞を受賞しました。ポスター発表の賞状の代わりに（賞状は後日オンラインで贈られる）、かわいい緑色のバックをいただきました。チェンマイでは伝統的な布が有名で、質がよいと知られています。今回いただいたバックはまさにその布で作られていました。

授賞式が終わった後は閉会の辞が述べられ、今年の第15回アジア保全医学会は終わりました。その後、全員で写真を撮ったり、会話をし、この3日間の中で出会った人たちに「おつかれさま、また来年！」と言ってお別れをしました。

この学会でいろいろな研究成果や報告を聞いて、今まで触れたこともなかった国や動物の色々な情報に接することができ、大変刺激的でした。休憩時間や昼食時の合間に他の研究者と話せる機会があり、その人の話や経験を聞いたり、アドバイスをいただくなど、たくさんの交流がありました。また、印象に残ったことは、多くの研究者たちが共同研究を積極的に行いたいと語っていたことです。今後の動物保全のためには異なる知識を持つ他国の研究



写真11 Closing Remarks



写真 12 参加した WRC の学生がとても楽しんでる様子！
上の写真に写っている D2 の斉さんはタイが楽しすぎて移住したいと言っていました！

者との共同研究が重要であることを一人一人強調していました。いつかここで出会った素晴らしい人たちと共同研究できる機会があればよいなと思いました。

来年の第 16 回アジア保全医学会は韓国，チェジュ島（済州島）で開催されることが学会の最後に発表されました。今回初めて対面で参加した国際学会はとても楽しく，興味深い研究をたくさん聞くことができたり，素晴らしい研究者たちと交流することができ，とてもよい思い出になりました。来年の学会も参加したいと思っており，今からとても待ち遠しいです！

■ 共同研究者との交流

鈴木瑛之

今回のアジア保全医学会の開催地タイには，コツメカワウソの研究の共同研究者（King Mongkut's University の Worata Klinawat さん）らがあり，学会参加と併せて初めて対面での交流の機会を得ることができました。10月28日には共同研究者の方がチェンマイにある2つの動物園へサンプリングの依頼をしに行くとのことで，同行いたしました。プライベートでは訪れることのできない海外動物園の動物病院の見学もすることができ，とても貴重な経験となりました。

また，動物園を回った後にはチェンマイ市内を案内していただきました。昼食はタイの伝統料理をいただきました。ASCM の

パーティーディナーとは異なる料理もあり，タイの食文化をより深く体験することができました。

また，チェンマイの夜景を見ることができる寺院は，黄金に輝いておりとても幻想的でした。



写真 13 タイの伝統料理



写真 14 チェンマイの高台にある寺院

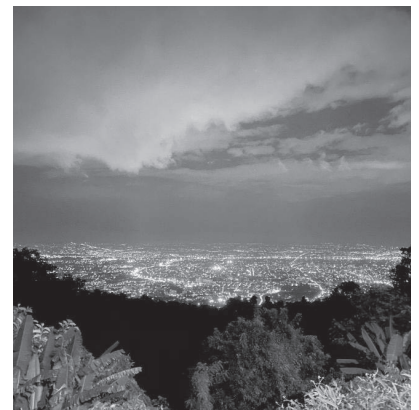


写真 15 チェンマイの夜景

バンコクに移動後は、まずカワウソが生息するバンコク近郊の湿原へ案内していただきました。この湿原は水上都市のようになっており、日本にはない風景を見ることができました。

また、船頭の方の自宅も訪問し、現地住民の生活にも触れることができました。その方の自宅近くにはカワウソの巣もあり、残念ながらカワウソを観察することはできなかったものの、巣を観察することができ非常によい経験となりました。

その後は、共同研究者のPaiさんの研究室を訪ねました。研究室では所属している全てのメンバーの方々とは挨拶することができ、非常に好意的に迎え入れて下さいました。また、実験設備を見学し、日本で行っている手順との違い等について意見交換をすることができました。



写真 18 共同研究者の方々の実験室



写真 16 バンコク近郊の水上都市

飛行機の乗り継ぎ

海外で開催される学会への参加の醍醐味の一つとして、飛行機の乗り継ぎの時間で様々な都市に立ち寄ることもあげられます。今回はタイに行く途中にシンガポールに立ち寄ることができました。シンガポールには研究対象のコツメカワウソではないものの、野生のカワウソが市内に生息しています。残念ながらカワウソを見つけることはできなかったものの、カワウソに関する看板を見つけ、シンガポールでは人間の生活のすぐ近くにカワウソがいることを実感することができました。



写真 17 カワウソの巣



写真 19 カワウソに関する看板

■ チェンマイでの他の活動（動物園見学）

新井花奈, 斉 惠元

The Chiangmai Zoo and Aquarium

学会前日（10月25日）に新井と斉はチェンマイにある動物園に行きました。チェンマイには動物園が3つしかありません：

The Chiangmai Zoo and Aquarium, Chiangmai Night Safari, The Siam Insect Zoo。この日はその1つ、The Chiangmai Zoo and Aquariumに行ってきました。

この動物園はとても大きくて、1周するのに3～4時間もかかる広さでした。そのため、動物園内では自分で運転できるゴルフカートや動物園の各区間に停車する路面電車がありましたが、



写真20 The Chiangmai Zoo and Aquarium の入り口



写真21 動物園の地図と動物園内を歩きながら見える景色



写真 22 (a) 鳥の飼育下繁殖と孵化の成功と (b) その雛たち。(c) カメの飼育下繁殖と孵化の成功と (d) 生まれたカメたち。(e) クマの性ホルモン分析の研究と結果。(f) 種に合わせての環境作りやエンリッチメントを行っていることを感じられた。

私たちは歩いて動物園内をじっくり見学することになりました。動物園を1周すると、結構坂道が多く、自然が多く残されているため、山の中に作られた動物園のような感じがしました。また、動物に対するエンリッチメントや研究をされていることが分かりました。

動物園を順番に1周すると、最後にゾウを見ることができます。アジアゾウが研究対象であるM2の新井さんはタイにいるゾウを自分の目で見ることを楽しみにしていましたが、動物園が広すぎて、着いたときにはもう遅く、ゾウは寝室に帰っていました。下の写真はゾウの背中しか見えなく、それを寂しそうに見る新井さんです。次に来るときに再リベンジですね。また、ここの動物園



写真 23 ゾウの背中だけを寂しそうに見る M2 の新井さん



写真 24 動物園の地図とチケット



写真 25 Night Safari で見た動物たち（左：アジアゾウ 右：キリン）
 こどもゾウは1頭しかいませんでした。

で飼育されているゾウが1頭だけということに驚きました。やはり、タイにいる多くのゾウは野生の環境と似ているエレファントキャンプで、のびのびと暮らしているのでしょうか。

Chiangmai NightSafari

学会終了後は、新井、斉とLimさんの3人で、チェンマイのChiangmai Night Safariに行きました。チェンマイ大学から車で20分移動し、夜のNight Safariを楽しみました。観覧用の車で園内を1時間ぐらいかけて一周しました。



写真 26 夜の動物園の入り口
 (きれい!)

ほとんどの動物は眠そうでした。お客さんから草食動物に専用の餌をあげることが認められており、キリンやウシなどの草食動物は路上で来園者を待っていました。また、Night Safariにはアニマルショーがありました。餌を使って動物たちが木の上や水の中で採餌する行動を見せるショーもある一方で、トラたちを訓練して“礼儀正しく”待ってもらうことや両手を合わせて餌を求めさせることもありました。動物園の立場は保全・教育目的に移行中だと思いますが、ショーを見せなくても来園者が楽しめる場所になるようにいつか変わると信じています。

第28回日本野生動物医学学会大会 開催報告

大会会長 田島木綿子（国立科学博物館 動物研究部）

2022年9月22日から24日の3日間、つくば国際会議場（茨城県つくば市）において、第28回日本野生動物医学学会大会が開催されました。2年ぶりとなる対面形式で全てのプログラムを実施しました。実は、つくば大会は2020年に第26回大会として開催を予定しておりましたが、COVID19の影響で中止となりました。その後、北海道大学における第27回大会の開催を待って、2022年の今年に2年越しとなる開催となりました。茨城県つくば市は、多くの国立機関や独立行政法人機関が集まっている研究学園都市として発展してきた歴史があり、2014年の20回大会に引き続き2回目の大会開催となりました（写真1）。

参加者は、事前登録者計194名（正会員92名、非会員15名、学生会員66名、学生非会員21名）、当日登録者計49名（正会員19名、非会員14名、学生会員9名、学生非会員7名）、合計243名となりました。24日午後行われた公開市民講座「野生

動物と自然史」には、学会関係者を含めて、計111名が聴講いたしました。ご登壇された国立科学博物館の山田先生、細谷先生、吉川先生は、学会ではなかなか聞くことが無い自然史・博物館・標本というキーワードから多様な内容をご講演されました（写真2）。本大会の傾向としては、例年より参加者は若干少ないものの、口頭発表演題数は36題、ポスター発表演題数は47題と多く、参加者の3割が発表するという内容の濃い学会となりました（写真3）。協賛企業ブースも6社ありました（写真4）。

発表者の中から、今大会において本学会から最優秀ポスター賞1件、優秀ポスター賞2件ならびに大会長から最優秀口頭賞1件、優秀口頭賞1件の栄誉を受けられた方々（敬称略）を下に記します。改めまして関係者の皆様本当におめでとうございます。最後に、ご参加・発表いただいた皆様、また開催を裏で支えていただいた国立科学博物館職員、筑波大学・麻布大学・日本大学・日



写真1 大会メイン会場



写真2 市民講座



写真3 ポスター風景



写真4 企業ブース風景

本獣医生命科学大学の学生の皆様に心から感謝申し上げます。次の開催地である鹿児島でまたお会いしましょう！

【最優秀ポスター賞】

P-30「糞中ストレスホルモン分析と行動解析によるツシマヤマネコのストレス評価」, ○田中千聖 1, 木下こづえ 1, 岩下明生 2, 木滑黄平 2, 伊谷原一 1 (1 京都大学大学院・野生動物研究センター, 2 ツシマヤマネコ野生順化ステーション)



【優秀ポスター賞】

P-29「体毛のホルモン分析から紐解く：都市環境がクリハラリスの繁殖に与える潜在的な影響の解明」, ○古荘寿奈 1, 山本俊昭 1, 鳶本 樹 1 (1 日本獣医生命科学大学・保全生物学研究分野)



P-47「上嘴欠損のオジロワシにおける脱着式義嘴製作の一症例」○渡邊有希子 1, 小笠原浩平 1, 安達 光 1, 河野晴子 1, 石井千尋 1, 齊藤慶輔 1, 大島尚久 2, 船越 誠 2, 古谷 博 3 (1 猛禽類医学研究所, 2 大島歯科医院, 3 美濃歯科医院)



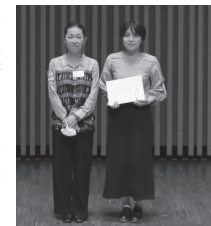
【最優秀口頭賞】

O-24「2022年に捕獲した小笠原諸島父島の外来クマネズミにおける殺鼠剤ダイファシノンの薬物動態・薬力学(PK/PD)解析による感受性評価」, ○清水敬太 1, 佐藤美侑 1, 片山雅史 2, 中山翔太 3, 近藤理美 4, 池中良徳 3, 一瀬貴大 3, 石塚真由美 3, 鎌田 亮 1, 小山田佑輔 5, 港 隆一 5, 橋本琢磨 5, 田中和之 6, 谷川 力 6, 武田一貴 1,7 (1 北里大学獣医学部毒性学研究室, 2 国立環境研究所, 3 北海道大学大学院獣医学院, 4 認定NPO法人エバーラスティング・ネイチャー (ELNA), 5 一般財団法人自然環境研究センター, 6 イカリ消毒株式会社技術研究所, 7 東京工業大学情報理工学院)



【優秀口頭発表賞】

O-22「ゾウにおけるシトクロームP450(CYP)ファミリーの系統解析」○渡邊可菜実 1, 近藤光希 1, 池中義範 1,2,3,4, 中山翔太 1,5, 石塚真由美 1 (1 北海道大学獣医学研究院毒性学研究室, 2 北海道大学獣医学部附属病院トランスレーショナルリサーチユニット, 3 北海道大学 One Health Research Center, 4 ノースウェスト大学, 5 ザンビア大学獣医学部)





認定専門医協会から

2023 年度日本野生動物医学会認定専門医試験の実施について

日本野生動物医学会認定専門医協会 和田新平

2023 年度日本野生動物医学会認定専門医試験を下記の 4 段階で実施します。

①書類審査

提出された書類を元に協会が厳密な書類審査を行います。その結果、受験資格を満たしていないと判断した場合は、その具体的な理由を記載した審査結果を、提出書類とともに返却します。

②動物園動物医学、水族医学、野生動物医学、野生動物病理学・感染症学、鳥類医学、各分野からそれぞれ 8 問ずつ計 40 問の 5 択あるいは穴埋め形式試験（一次試験）。

③希望する専門分野に関する筆記試験（二次試験・筆記）。

④希望する専門分野に関する実地面接試験（二次試験・実地面接試験）

※一次試験および二次筆記試験は対面にて実施するが、二次実地面接試験はリモートでの実施の選択も可能です。必要書類提出時にメールにて和田ないし浅川までご連絡下さい（メールアドレスは本稿末参照）。

受験希望は受験要項を参照し受験準備を実施してください。なお、受験要項、試験用参考書一覧、受験申込用紙は以下で参照およびダウンロード可能です（2020 年 12 月 30 日にアップされた資料をご参照下さい）。

<https://sites.google.com/a/jczwm.com/information/>

別表 1 評点基準

項目	点数	備考
野生動物医学会会員歴	3 年以上 20 点	3 年は必須
野生動物・動物園 経年歴* ¹	5 年以上 30 点	5 年は必須
野生動物医学関連論文、その他* ²	筆頭 10 点 / 報 共著 5 点 / 報 (総計 60 点まで)	2 報は必須、内 1 報は野生動物医学会誌
日本野生動物医学会発表	筆頭 10 点 / 回 共同 5 点 / 回 (総計 40 点まで)	2 回は必須 (共同も含む) 同等のワークショップ等も含む
野生動物医学に関連した社会貢献* ³	総計 20 点まで	
博士号	20 点	野生動物医学関連のテーマ
	総計 100 点以上	

*¹ 経年歴は獣医師免許取得後の当該職域における経年歴とする。大学学部生時代およびそれ以前の経験についてはこれに含めない。

*^{2,3} 内容判定は運営委員会（試験委員会）で判断する。

2023 年度日本野生動物医学会認定専門医試験受験要項

1. 受験資格者：

1) 下記の日本野生動物医学会認定専門医試験受験資格規定に合致する者。

日本野生動物医学会認定専門医試験受験資格規定

- 日本国内の獣医師資格を有し、獣医師としての十分な道徳観と倫理観をもつ者であること。
- 出願時に 3 年（36 ヶ月）以上継続して日本野生動物医学会会員であること。
- 野生動物医学に関連した専門的研究または職業に従事した年数が総計で 5 年（60 ヶ月）以上であること。
- 筆頭著者論文 2 報以上（内 1 報は野生動物医学会誌）であること。
- 別表 1 の評点基準による合計点が 100 点以上であること。
- 学会活動、研修会参加、論文発表などを行っていること。

2. 提出書類：

下記書類を日本野生動物医学会認定専門医事務局宛てに郵送して下さい。

- 所定の受験申込フォームに必要事項を記載したもの。
- 自身の関わった主要な学術論文の発表年、題名、著者名（複数の場合は申請者に下線を付す）、発表誌名を取りまとめた一覧表（書式自由）を 2 部、および各学術論文の表紙および要

旨をコピーしたもの各2部。

- 3) 自身の関わった主要な学会発表の発表年、題名、著者名（複数の場合は申請者に下線を付す）、発表学会名を取りまとめた一覧表（書式自由）を2部、および各講演要旨をコピーしたもの各2部。
- 4) 野生動物医学に関連した社会貢献についての自己アピール（1,000字程度）2部。
例：野生動物医学分野に関連した一般向けの活動（講演、執筆、救護ボランティアなど）、SSCやショートコースなどの参加、海外の野生動物医学に関する資格の取得等
- 5) 学位を取得した者はその学位論文の和文要旨のコピー2部。
- 6) 4cm×5cm大の顔写真（裏面に氏名記載）を2葉。

書類郵送先：

〒180-8602
東京都武蔵野市境南町1-7-1
日本獣医生命科学大学 水族医学研究室 和田新平

3. 締め切り：

2023年7月31日

4. 受験票送付：

2023年8月中旬に書類審査に合格した受験者に送付する。

5. 受験料：

10,000円（上記の書類審査に合格した者のみ下記銀行口座に払い込む）。払込の締め切りは2023年9月30日。

払込先銀行口座

銀行：北洋銀行

支店名：北七条支店

口座No：3871623

口座名：日本野生動物医学会認定専門医事務局

事務局代表 坪田敏男

6. 認定試験日程：

2023年10月～11月を予定（受験希望者の要望を考慮します）

7. 試験用参考書について

参考書一覧は

<https://sites.google.com/a/jczwm.com/information/>

よりダウンロード可能です→2020年12月30日にアップされた資料をご参照下さい。

8. その他：

試験に関して何らかの変更がある場合は、学会ホームページとメーリングリストで順次公表します。また、試験に関する質問は、氏名・所属を明記の上、下記アドレスまでe-mailにてお問い合わせください。

【質問の送付先】

和田新平 swada@nvl.u.ac.jp

植田美弥 ueda.m@hama-midorinokyokai.or.jp

（件名に「野生動物認定専門医について」と付記）

各種委員会から

日本野生動物医学会のホームページリニューアルのお知らせ

広報委員会 近藤圭佑（マリンワールド海の中道）

皆さん、学会のホームページがリニューアルしているのはご存知ですか？ 齊藤慶輔委員長を中心に2019年から改定作業を始め、現在も鋭意改善を進めているところです。デザインを一新してよりスタイリッシュになっており、新しいお知らせにアクセスしやすい設計になっています。また、これまで学会HPの更新を広報委員会が一元管理していましたが、システムの改修により、各委員会や学会が直接お知らせなどをアップできるようになりました。そのためスピーディな更新が可能になって使い勝手もよくなっています。さらに、年会費の支払いにクレジット決済ができるようになっています。これにより、毎年銀行振り込みに行く手間が省けるほか、自動更新機能も付くので払い込み忘れも防ぐことができます。これは便利！今後のアップデートでは、会員ページが作られる予定です。会員ページでは会員に限定されたお知らせの閲覧や、年会費の支払い履歴の確認ができるようになります。

2022年中に運用開始できるように動いていますので、アップデートまでもう少しお待ちください。

そして、広報委員会ではFacebookの運用にも力を入れ始めています。現在委員会の若手3名で【連載リレー 野生動物医学の現場】と銘打って、それぞれの職場の野生動物医学の現場を伝える投稿をリレー形式で始めています。野生動物医学に興味のある一般の方や学生さんに現場の仕事について知ってもらい、より興味を持ってもらったり、応援してもらったりすることにつながるのがこの企画の目標です。今はまだ広報委員の3人でリレーを回していますが、ゆくゆくは学会員みんなでリレーをつなげて、広く野生動物医学の重要性や仕事としての魅力を伝えていけるようなものにしていきたいと思っています。リレーに加わって投稿の協力をしてほしいよ！という方がいらっしゃれば、広報委員まで是非お知らせください♪



日本野生動物医学会ホームページ



日本野生動物医学会 Facebook ページ



学生部会から

代表挨拶

清水里香（麻布大学獣医学部獣医学科 2 年）

はじめまして。この度、学生部会第 22 期代表を務めることになりました。麻布大学獣医学部獣医学科 2 年の清水里香と申します。このような機会は長い人生で、滅多にやってくるものでは

ないと、気を引き締めつつ、とにかくこのチャンスを楽しむぞ！という気持ちで頑張っていく所存です。どうぞ、よろしく願いいたします。

私が 1 年生の時は、COVID-19 の影響で野外活動や対面形式の交流行事が次々と中止になったことをきっかけに野生動物医学への志も薄れていました。しかしながら、一步踏み出してみれば、

日本野生動物医学会第 22 期学生部会 役員及び支部長名簿（令和 4 年 12 月）
[★新しく就任したもの]

学生部会代表	：★清水里香	（麻布大学獣医学部獣医学科 2 年）
	：★金山琴未	（酪農学園大学獣医学群獣医学類 2 年）
副代表	：★鈴木美羽	（麻布大学獣医学部動物応用科学科 1 年）
	：伊藤萌林	（北海道大学共同獣医学課程 5 年）
事務局長	：★松井瑞嬉	（酪農学園大学獣医学群獣医学類 2 年）
	：★松田 鈴	（岡山理科大学獣医学部獣医学科 2 年）
会計	：★井上 和	（山口大学共同獣医学部獣医学科 2 年）
北海道大学	：★春田千紘	（獣医学部共同獣医学過程 2 年）
酪農学園大学	：★志賀泉美	（酪農学園大学獣医学群獣医学類 3 年）
	：★水野夏帆	（酪農学園大学獣医学群獣医学類 3 年）
帯広畜産大学	：丸山青葉	（畜産学部共同獣医学課程 4 年）
北里大学	：早川佑奈	（獣医学部動物資源科学科 3 年）
岩手大学	：菅原千尋	（農学部動物科学科 3 年）
日本獣医生命科学大学	：★菅野紗希	（獣医学部獣医保健看護学科 3 年）
	：★中川 悠	（獣医学部獣医学科 3 年）
東京農工大学	：石井二千夏	（農学部地域生態システム学科 3 年）
	：川嶋夏月	（農学部地域生態システム学科 4 年）
東京大学	学生部会総会での決議により閉鎖することが決定	
麻布大学	：★黒田紗希	（獣医学部獣医学科 2 年）
	：★清水里香	（獣医学部獣医学科 2 年）
日本大学	：★西川 樹	（生物資源科学部獣医学科 2 年）
帝京科学大学	：★大戸 海	（生命環境学部アニマルサイエンス学科 3 年）
岐阜大学	：川嶋梨湖	（応用生物科学部共同獣医学科 4 年）
	：巽 洋希	（応用生物科学部共同獣医学科 4 年）
大阪公立大学	：★大内 宙	（生命環境学域獣医学類 4 年）
岡山理科大学	：横田 遥	（理学部動物学科 3 年）
鳥取大学	：岡村駿治	（農学部共同獣医学科 4 年）
	：岩元千紘	（農学部共同獣医学科 4 年）
山口大学	：★井上 和	（共同獣医学部獣医学科 3 年）
宮崎大学	：筒井 静	（農学部獣医学科 5 年）
鹿児島大学	：大須賀詩織	（共同獣医学部 4 年）

※学生部会の活動については Facebook, <https://www.facebook.com/yasedo.gakusei/> をご覧下さい。

こんな中でも思わぬきっかけは落ちているもので、学生部会内での小さな出会いや、経験が積み重なって今ここにいます。

前執行部の先輩方から受け継いだ制度を情熱と共に引き継ぎ、コロナに負けず、ほんの少しのきっかけで世界が変わるという瞬間をみんなに体験してもらえよう学生部会を作っていきたいです。

そうそうたる先輩方や同期に囲まれて、自分の未熟さに不安になることは多々ありますが、熱意と勢いは誰にも負けず、貪欲に成長していきたいと思えます。

また最後に、代表就任の機会をくださった21期代表・高橋さんを始めとする執行部の皆様や先輩方、就任前から企画に快く応じて盛り上げてくれた後輩や同期に書中をもってお礼を申し上げます。



地元福岡県宗像市にて世界遺産 宗像・沖ノ島の関連遺産群となった大島で虫取りしているところ。

前代表挨拶

高橋 航 (麻布大学獣医学部獣医学科5年)

日本野生動物医学会会員の皆様、お世話になっております。学生部会代表の任期を満了し、退任することになりました高橋 航です。この1年間、学生部会にご理解とご協力をしていただいた皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

1年間という短い任期でしたが、とても500字で収まるようなものではありませんでした。設立から20年という節目に、前例踏襲で成り立っていた学生部会を根本から見直し始めました。存在意義、会則や規約、活動内容、そして学生自身がどうあるべきかを問い続けました。任期中に達成できたものもあれば、これからは議論が必要なものもありました。全てを解決できなかったのは私の力不足ですが、それほどまでに学生部会の問題は複雑化していました。そして確かなのは、思考停止こそが原因だということです。

いつも身勝手な私でしたが、この21期執行部3人の支えがあって学生部会の改革に着手し、無事任期を終えることができました。22期はCOVID-19の逆境の中で入会してくれた後輩達が、舵を取っていきます。彼女達の今後の活躍に期待したいと思います。学生部会の今後のますますの発展を祈念して、退任の挨拶といたします。



左：第21期代表 高橋 航 右：同副代表 伊藤萌林

■ 学生部会セミナー活動報告

金山琴末（酪農学園大学獣医学群獣医学類2年）

学生セミナー係は、今年から本格的に活動を再開し、計2回のオンライン学生セミナーを開催しました。

第1回学生セミナーは4月24日に開催し、約20人の学生が参加しました。野生動物に関わる獣医師の実際の活動内容と今後の課題について学ぶ機会を作るという目的で行いました。山形県の有限会社ワイルドライフ・ワークショップで活動されている獣医師の東英生先生をお招きして、学生部会員を対象にご講演いただきました。野生動物を治療するようになった経緯や、今まで治療されてきたクマ、シカ、サルなどの野生動物の症例について、多くの写真とともにお話し下さいました。また、近年の捕獲頭数などのデータをもとに、野生動物がおかれている状況や人間との関係、解決すべき課題を先生ご自身の視点からご説明下さいました。講演後はお時間の許す限り学生からの質問に答えてもらいました。事後アンケートでは「使用している罠はどういったものがあるのか」「ツキノワグマの錯誤捕獲はなぜ起こってしまうのか」などの質問があり、東先生には錯誤捕獲の原因と対策や、実際の罠の写真とともに具体的な罠の作り方などについてご返答いただきました。

第2回学生セミナーは、9月2日に開催し、様々な立場の方々のお話を聞き自身の見識を広げるという目的で約20人の学生が参加しました。日本大学生物資源科学部教授の恒川直樹先生をお招きして、学生部会員に限らず、多くの学生を対象にご講演いた

野生動物医学会学生部会
2022年度第1回学生セミナー

- 日時: 2022年4月24日(日) 19:00~20:30
- 形式: ZOOM(途中入退出可!)
- 参加費: 無料
- プログラム

19:00~20:00: 東先生によるご講演
20:00~20:30: 質疑応答(20:30以降は希望する学生は残って質問可能)

<参加方法>
以下のURLでフォームにアクセスし、必要事項をお送りください。開催日の前日までにZOOMの参加情報をお送りします。当日の参加名はフォームに入力した名前での参加をお願い致します。

<https://forms.gle/D5Ljp18N9WDko9YH8>

第1回学生セミナーのお知らせ

野生動物医学会学生部会
2022年度第2回学生セミナー

- 日時: 2022年9月2日(金)19時~21時
- 形式: ZOOM(途中入退出可!)
- 参加費: 無料
- プログラム

19時~20時: 恒川直樹先生によるご講演
20時~20時30分: 質疑応答
20時30分~21時: 参加者同士で感想共有

参加方法
以下のQRコードからも申し込み可能です。必要事項をお送りください。必ず大学から割り当てられているメールアドレスをご記入ください!

一見「家畜」と「野生動物」は正反対の生き物のように感じがちですが、家畜は野生動物から生まれました。野生動物の家畜化の過程を知ることで、今までとは違う視点で「野生動物」とは何かを認識できるはずです。多くの方のご参加お待ちしております。

第2回学生セミナーのお知らせ

だきました。人間の文化と野生動物の関わりや、家畜化・再野生化などの問題について、どう向き合っていくべきかについてお話し下さいました。機器の不具合で予定していたグループディスカッションを行うことはできませんでしたが、恒川先生のご厚意により、予定されていたより長く質疑応答の時間をとって行いました。前回の学生セミナーと同様に、事後アンケートを行ったところ、「新しい視点から考えることができる貴重な機会だった」「色々な視点から学ぶことが勉強のやる気につながった」などの感想が寄せられました。

以上のセミナーが、参加した学生にとって実りあるものになっていることを学生セミナー係一同願っております。また、セミナーでご講演いただいた先生方と参加学生の皆様に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

■ 『野生動物医学と学生部会の未来を考える会』

大杉祐生（酪農学園大学獣医学群獣医学類5年）

9月3日にオンラインで開催された学生部会企画『野生動物医学と学生部会の未来を考える会』について報告します。

昨今の学生部会は、その活動内容の不透明さから、必要性やその存在意義が問われ続けていました。「野生動物」という名を冠していながら、課外活動や研究、趣味などを通して実際に野生動物と関わる学生は少なく「何をしているか分からない」「ただの交流団体」と厳しい言葉を頂戴することも多々ありました。

獣医学部のカリキュラムでこれ以上、野生動物や生態学のことを盛り込むのが厳しい中で、学会と学生部会で教育の場をどのように作っていくべきかを議論すべく開催しました。

本会は学生部会執行部をはじめとした獣医学生5年生の4名



『野生動物医学と学生部会の未来を考える会』ポスター

により企画され、浅川満彦先生（酪農学園大学）と22期学生会代表である清水里香さん（麻布大学2年）を講演者として招待しました。参加者は学生に限らず、学生会のOBや社会人、教員を含む約40名が参加しました。

まず21期学生会代表である高橋さんの学生会の現状説明と開催趣旨の説明に始まり、第一部では浅川先生に野生動物医学について、獣医学部の野生動物学教育の歴史や現状について、これまでのご経験も踏まえて、ご講演いただきました。第二部では、清水さんが新代表の立場から「今後、学生会をどうするか」という演題で今後の展望についてお話下さいました。

第三部のディスカッションでは、学会と学生会でどのように野生動物学教育の場を作るかについて、低学年からOB、先生方を交えて議論しました。

OBの方々のお話では立ち上げ当初は野生動物の情報が少ない中、フィールド調査や研究で野生動物に関わる学生の情報網や学術活動の場としての機能を果たしており、現在よりも実践的に野

生動物と関わる学生が多かったことが明らかとなりました。また、学生会のシステム作りや会員管理で手一杯になっている現状に対し、学生会を『利用する』という考え方が必要なのではないかという意見があり、より能動的に会に関わることが執行部以外の学生からも求められると感じました。

また、学会と学生会の意思疎通がうまくできていないことが大きな問題として取り上げられ、他学会でも見られるような「相談役」を設置する具体的な案も提起されました。

Student Seminar Course (SSC)の廃止やコロナ禍も相まって、学生会の存在意義が揺らいでいた最近ではありましたが、学会から新たにWildlife Educational Program (WEP)が企画され、学生会からは学生セミナー係が始動しています。学生会と学会の関係を密に保ちつつ、学生会会員の力を借りて、主体的に活動することが野生動物医学教育の発展に繋がると感じました。

最後に、今回の会をともに主催した高橋さん、伊藤さん、大島さんをはじめゲストの浅川先生、清水さん、参加いただいたOB、先生方や学生の皆さんに御礼申し上げます。

■第28回日本野生動物医学学会大会学生集会の報告

西川 樹（日本大学生物資源科学部獣医学科2年）

2022年度日本野生動物医学学会つくば大会にて、現場の先生方と学生との交流を目標に、学生会が主体となって、自由集會を企画・開催しました。

本集會では「奄美大島の“これまで”と“これから”」をテーマに、現地で獣医師としてご活動されている伊藤圭子先生をお呼びして、奄美大島での野生動物救護や奄美ノネコ問題の現状を中心に講演いただきました。

奄美大島ではノネコによって希少野生動物が捕食されており、固有の生態系を守るためにノネコの捕獲が行われています。しかし、ネコは愛玩動物として広く親しまれている存在であるため、「ノネコ」の意味や存在、ノネコが引き起こす様々な問題を知らない人も少なくありません。

「TNRや殺処分は本当のゴールなのか」「野生動物救護のその先とは」といった、答えのない大きなテーマを含んだ講演は参加者の考えるきっかけとなり、「死は終わりではない」という先生の言葉は印象的で、動物の命を想う多くの参加者の耳に残っていると思います。

また、新たな取り組みとして、集會の合間に参加者にリアルタイムでアンケートを実施して、実際に各々の意見や価値観を共有



講演を聴く参加者の様子



Slido を用いた意見共有タイム

題の根本にある野生動物保全の複雑さを改めて痛感させられたのではないのでしょうか。

ディスカッションには伊藤先生にもご出席いただき、学生に向けてコメントをいただきました。それぞれが目指す道は様々ですが“野生動物”に関わる多くの学生たちが、先生のお言葉に背中を押してもらったように思います。ディスカッション後には懇親会も行い、オンラインの壁を越え、学生同士さらに広い繋がりを持つことができました。

今回、学生集会係リーダーとして、多くの先輩方や同期に助けてもらいながら、初めて企画運営に携わりました。企画当初は自身の知識量や運営経験の少なさに不安もありましたが、学生集会終了後には多くの参加者の方から満足の声をいただき、運営に携われたこと、奄美大島について学ぶ貴重な機会を設けることができたことを非常に嬉しく思います。今回の学生集会が多くの方に実りあるものになっていれば幸いです。

最後にご多忙の中、講師を快諾いただいた伊藤先生、本集会の開催・運営に携わった皆様、また参加者の皆様に、この場を借りてお礼申し上げるとともに、第28回日本野生動物医学会大会学生集会の報告といたします。

【講演者】

伊藤圭子先生（奄美いんまや動物病院）

【コーディネーター】

西川 樹（日本大学生物資源科学部獣医学科2年）

伊藤詩乃（北海道大学農学部森林科学科2年）

井上 和（山口大学共同獣医学部2年）

松井瑞嬉（酪農学園大学獣医学群獣医学類2年）

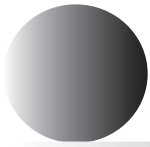
したことで、より積極的な意見交換・コミュニケーションを図りました。

3年ぶりのオンサイトで開催でしたが、当日の参加者は80名を超え、学生同士での交流はもちろん、ご講演終了後も積極的に質問する姿が見受けられました。学生だけでなく社会人の方々も参加されたことで、大変実りある有意義な時間となったかと思えます。

後日オンラインにて開催したディスカッションでは、殺処分やTNRへの自身の価値観の再確認やノネコ問題への誤解を解くために、私たちに何ができるか、熱く意見を交わしました。議論を進める中で、一度定着してしまった誤解を解く難しさ、ノネコ問



ディスカッション及び懇親会の様子



動物園・水族館から

動物園・水族館リレー連載

今回は、水族館の現場獣医師とは少し違った視点で、飼育展示動物への診療アプローチをされている方をご紹介します。学生時代からの友人でもあり、今もアシカの麻酔処置など水棲動物の診療で協働する仲間のひとりでもあります。 [編集委員・田中]

「私のココロにささった言葉」

加藤桂子（酪農学園大学獣医学群獣医学類
獣医麻酔学ユニット 助教）

「水棲動物の麻酔って必要だけど難しいんだよね」

この言葉は名言でもなんでもないし、きっとこの言葉を紡ぎだした先生も言ったことすら忘れていくぐらい、失礼ですがまったく重みのない言葉だったと思います。まさか、この言葉が私の獣医として進むべき道を示してくれたとは夢にも思っていないでしょう。

大きな体とそれが生み出すダイナミックな動きや美しいフォルム。「海のギャング」とも「キラールホエール」とも呼ばれ物騒な異名をもつシャチは、小さなころから私の一番大好きな動物でした（ちなみに今は猫も大好きです）。シャチと触れ合いたくて小さなころはなんでも水族館に通い、そのころすでに将来獣医さんになりたかった私は、「海棲動物の獣医さん」になることを強く夢見ていたのは懐かしい記憶です。そのため、運よく獣医学部に入學し獣医師になる一歩を踏み出した時には、水族館の獣医師になろう、と決めていました。そんな理由から研究室も「魚病学」に入り、さらに海外でも働きたかった私は、海棲動物を学ぶために留学も考えていました。

そんな大学3年生の時、獣医麻酔専門医を取得されていた先生が一度講義に来てくれたことがあります。正直何を話されていたかはもう覚えていないですし、なぜそう思ったのかもわからないのですが、その瞬間私の中で麻酔に対して「これだ！」と強く思いました。これが天職だと運命だというにはおこがましいですが、本当にピカッと何かが光り、ストンと納得したのを覚えています。

それから私には2つ、やりたいことができました。「麻酔」と「海棲動物」です。しかし、その頃の私はこの2つを結ぶことができず、結局何がしたいのかわからない宙ぶらりんの状態になっていました。そんな中、実習にいった水族館でお会いした獣医さんに

言われた冒頭の言葉がグサリと心に刺さりました。

「海棲動物の麻酔が難しいなら自分がその専門になればいいじゃん」

今になるとやや恥ずかしいですが、単純でまだ若く強かった私はこの言葉に妙案を得たとばかりにこう思ったのを覚えています。

しかし、それから10年以上経った今も、精神的にあまり大人にならなかった私は生意気にも実はそう思っています。

あの言葉とこの想いが私の原動力となり、勉強するなら一流の所で、という家族の考えと理解のある先生方や同僚などの協力のもと酪農学園大学麻酔科の社会人大学生になり、昨年無事院を卒業し今は日本一の麻酔科といわれる酪農学園大学で麻酔科医として働いています。

犬猫が基本的な診療対象動物ですが、1年に1度ほど、数としては少ないですが、クマなど園館動物の麻酔依頼があります。水棲動物の麻酔依頼も何件かありました。もちろん水棲動物だけを専門にするには私の経験値を含めた多くの問題があります。しか



写真1 日常診療の一コマ



写真2 オウサマペンギンの麻酔処置

し、好きでやりたかった麻酔という分野で、水棲動物に関われることは本当に幸運だと感じています。もちろんたくさんわからないこともあるし、経験も少ないですが、チャンスがあればいつでも勉強したいと思っています。

麻酔は「準備」がとても大切であると私は信じています。生理学はもちろんのこと症例の基礎疾患等を理解し、何が起こるか予測してシミュレーションを行い「準備」して行う、これが麻酔の醍醐味だと思います。特に水棲動物は特殊な生理学ですし、あまり「麻酔」という分野は発展していませんのでわからないことも多くあるかと思っています。つまりは、より「準備」が麻酔の質に影響します。

自分が経験のないことに取り組むことを、人は「チャレンジ」

と呼び多少なりとも恐怖心を持って臨むかと思いますが、私はワクワクしてしまいます。新しいことを学べるチャンス、水棲動物のことを知れるチャンス、獣医麻酔学の発展のチャンス、水棲動物への治療のチャンス、たくさんのチャンスがそこに隠れています。すこしずつ自分の夢を、やりたかった、なりたかった獣医師になる一歩を歩んでいるのだと思わせてくれます。そしてなによりも楽しいです。

生意気な私の想いが今もなお自分自身を突き動かしてくれています。

自分の歩んだ道を後悔はしていません。

これからも私はこの道を、選んだ自分の未来を後悔することはないでしょう。



うちの自慢の工具箱！



大下 梓（秋吉台自然動物公園）

秋吉台サファリランドで愛用しているっておきのアイテムがこちら「ガムの空きボトル」。プラスチック製で軽く、フタを簡単に開け閉めでき、片手で持てる絶妙なサイズ感。そして何といっても捨てる容器の再利用なので環境にも優しいのです。これを何に使うのかというと、アルコール綿やイソジン綿入れとしてです。持ち運びにもとっても便利、落としてもそう簡単には割れません。時にはこの中に動物に与える経口薬やビタミン剤なんかも入れて担当者に渡します。数種のビタミン剤を容器の中で混ぜ合わせるために振り回してもこぼれませんし、ある程度の遮光効果もあります。他にも DIY で使うビス入れにするなど用途は多様です。ただ注意しなければいけないのが液体の保管にはむいていません。密閉性はないので倒れると漏れ出してしまいます…。それでも倒れないようにすればいいので、駆虫薬液入れとして注意しながら使っています。汚れたら気軽に交換できますし、本当に優れものです。多用するので、病院にはガムボトルがそこかしこに散らばっています。この万能容器をストックするため、食後はガムを噛む習慣ができました。



写真1 ガムボトルの中身は？



写真2 中身

日動水誌より

橋本千尋（周南市徳山動物園）

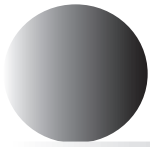
第 63 巻 第 4 号 2022 年 3 月に掲載された獣医学関連記事の紹介

症例報告

「トラの甲状腺扁平上皮癌の 1 例」

千葉友章，堂前弘志，北川和也，坂牧朝仁，大井毅

斃死した 20 歳齢の飼育下トラ (*Panthera tigris*) を病理組織学検査したところ、甲状腺扁平上皮癌、扁平上皮癌の肺転移と診断された。甲状腺を原発とする扁平上皮癌は、これまでに動物での報告例はない。トラにおいて、麻酔下による臨床検査は診断の一助になりうるが、本症例は麻酔のリスクが高く、診断が困難であった。今後も更なる情報の集積が必要である。



前号では、動物病院の院長としてご活躍されている玉井勘次さんに、学生時代から動物園勤務、現在に至るまでのエピソードをご紹介いただきました。今号では、NPO 法人どうぶつたちの病院の越田雄史さんに、多感な学生時代から対馬で奮闘される日々に至るまでをご紹介いただきます。

ツシマヤマネコに興味ありますか？

越田雄史（NPO 法人どうぶつたちの病院 理事長）

「NPO 法人どうぶつたちの病院」理事長の越田雄史と申します。お世話になっている玉井勘次先生から執筆のお話をいただき、柄にもないことへの挑戦となりました。自慢できることも、参考になるようなことも書けませんが、本稿が何かのきっかけになれば幸いです。法人のこと、学生時代の話、重要なお知らせの順で書いてみます。

■ NPO 法人どうぶつたちの病院

2004 年、非営利の動物医療団体「NPO 法人どうぶつたちの病院」が設立されました。設立の主体はツシマヤマネコ保護に情熱を注いでいた九州・沖縄の開業獣医師達でした。獣医師が常駐する対馬初の動物病院「対馬動物医療センター」を開設し、獣医療の提供、飼育動物の適正飼養推進、ツシマヤマネコを始めとする野生動物の救護活動を行っています。

私の主な仕事は動物病院の診療と運営です。赴任当初、動物病院の存在はまだまだ周知されていませんでした。対馬では「飼育動物を病院に連れて行く」という習慣がなく「犬猫にお金を払うなんて」とよく言われたものです。病院に誰も来ない、それが当たり前の日常でした。病院で待っていても何も起こりませんので、車で集落をまわり、猫を飼っている人を探し歩いていました。幸いにも、当時は九州地区獣医師会連合会から猫の不妊手術の全額補助がありました。飼い主とお話し、手術の承諾を得て、車のない方は猫の送迎、術後の管理が無理な方は無料で入院、と至れり尽くせりの対応を行っていました。その甲斐もあり、病院の知名度や飼い主さんの意識も徐々に向上し、今では年間 2000 件ほどの来院数となっています。

現在、対馬では 8 名のスタッフが働いています。環境省と業務契約を行い、飼育ヤマネコの健康管理、傷病野生ヤマネコの治療などを行っています。対馬に来て 13 年、39 頭の傷病野生ヤマネコを治療しました。どうですか？ 多いと思いますか？ 少ないと思いますか？

対馬は野鳥の島、バーダー憧れの聖地です。沢山の傷病鳥が運ばれてくるのかなと思いたくなるのですが、そうでもありません。住民の意識にもよると思いますが、平野が少なく山が多い、そんな地形が関係しているのかもしれませんが。

どうですか？ 私の仕事振りをイメージできたでしょうか？ 中身の詳細は省きますが、何だかんだとデスクワークに時間を割いています。時には飼育員にもなり、ヤマネコ関連会議への参加もあります。野生動物の獣医っぽいことをあまり行っていない感じですが、これでも自称「ツシマヤマネコの獣医」です。

■ 学生時代のお話（中学、高校、予備校生編）

ここからは私が今の仕事にたどり着くまでのあれこれを深掘りしていきます。

中学生の頃から野生動物に関わる仕事をしたいと思っていました。進路指導で担任にそう伝えると、「アフリカでレンジャーになりたいのか？」と言われ、がっかりしたことを今でも鮮明に覚えています。とは言え、成績は 5 段階評価のオール 3 程度、当時の僕には野生動物の獣医師になりたいという夢を言葉にする勇氣がありませんでした。

高校は近所の私立男子高校、大学には行きたいけど今のままでは学力が足りない、そんな若者が集う特進コースに入学しました。高校というよりは塾の様な感覚、授業は 0 限から 7 限、部活動禁止、体育祭・文化祭なし、修学旅行の夜は英単語テスト etc…。

高校 3 年生の冬、ナホトカ号重油流出事故が起こりました。毎日目にするニュース、何もできない自分、悶々とする日々、大



写真 1 集落を訪問して猫の不妊化について説明

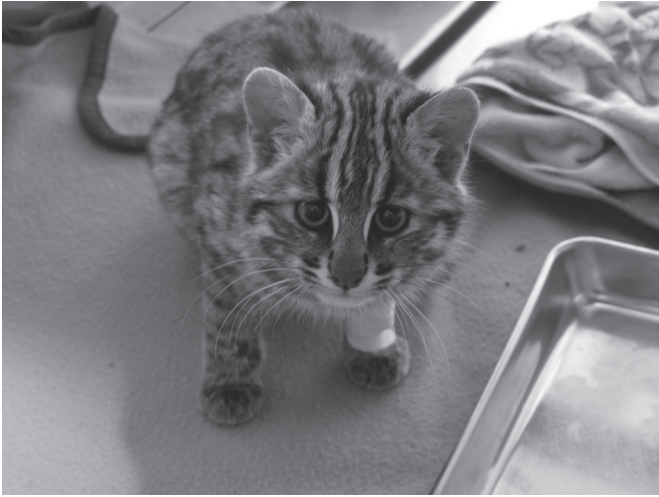


写真2 初めて治療したヤマネコ（亜成獣）

学入試を全て消化した僕は1人福井の浜に向かいました。ボランティアに支給される炊き出し、カップやタオル、油塗れの砂浜で油まみれになりながら「ボランティアとは何なのか？」を考えさせられる日々でした。「参加することに意義がある」とはよく言ったもので、人それぞれ感じ方に違いはあれど、体験してみなければわからないことが沢山あるのだと感じ入りました。一方で、獣医師である今、同じ様なことが起こったら何ができるのだろうか？とも思います。あれから四半世紀、幸いにも同じ様な規模の事故は起きていません。でも、いつ、何処で起こるかかわからないのが災害です。いざという時に何かができる獣医師でありたいものだと、原稿を書きながら改めて感じています。因みに、対馬ではしばしば油にまみれたオオハムやアビ、ウトウなどが保護されてきます。本院には十分な設備がないので、洗浄は非常に大変です。技術や知識は勿論のこと、設備環境は重要だなと感じます。と、言い訳をしておきましょう。本当になかなか上手く行かないのです、技術と経験が足りないのでしょうかね…。

全ての大学から断られ、福井の浜に別れを告げて予備校生になりました。それでも思う様に学力は上がらず、模試判定は「E」ときどき「D」、どん底の予備校生でした。ひょんなことで知った北里大学の推薦入試を受験しました。試験は英語、数学、理科の3教科と面接だったと思います。筆記試験は自分でもビックリの好感触でした、でも面接はぐだぐだでした。面接対策を全く行っていなかったのが、今思えばとんでもない話だなあって思います。面接官のなんとも言えない微笑み、冬なのに汗が止まらず

涙顔、不合格を確信して帰路につきました。

でも合格したんです。何故なんだろうと今でも不思議です。汗をかきながら、「野生動物の獣医になりたい」って馬鹿のひとつ覚えみたいに言っていたのがよかったのでしょうか？ 変わり者に興味を湧いたのでしょうか？ 結果オーライ、夢の続きを手にした19の冬でした。

■学生時代のお話（大学生編）

新型コロナウイルス感染症が広がる前、対馬にも多くの大学生が実習に来ていました。色々とお話をすることがありますが、いつも実習歴に驚かされていました。兎に角、色々なところに実習に行っている、国内は勿論のこと海外も。最近の大学生は真面目だなあ、お金持ちだなあっていつも思っていました。

北里大学の獣医学部、1年次は神奈川県相模原キャンパスで勉学に励みます。初めての1人暮らし、大都会ではないけれども渋谷まで電車で40分、アルバイトをして、遊んで、朝起きれずに昼から登校して、いわゆるキャンパスライフってやつを満喫!?していました。

2年次からは青森県の十和田キャンパスに移動します。遊ぶ場所も少なく、アルバイト求人もほぼありません、ほとんどの学生が部活に所属していたと思います。当時はサークルというものがなく、過去問を入手するには部活に所属する必要がありました。授業後は部活、週末は県内の何処かに遠征、疲れた体は近所のような温泉で癒やす。部活の先輩からは徹マンとパチスロを習いまして、授業もそっちのけで…。冬になったらパウダースノーでスノーボード三昧、青森は最高の場所です!!

大学生時代、初めての实習は2年生の時に行った十勝の家畜改良センターでした。家畜に興味があった？ いや、ありません、北海道に行ってみなかったのです。実習した内容はよく覚えていないのですが、もの凄く大きな馬がいたことと、仔牛に指を吸われる感触が印象に残っています。あと、スタッフの人達が楽しそうに働いているなあと感じました。きっと、学生にはわからない苦労もいっぱいあったのだと思いますが。

3年生の時にも夏期実習に行きました。行きたい実習地は2つあったのですが、ひと夏に2か所はしんどいなあと思い、もう1つは4年生になってからにしよう…。そして選んだのは道東野生動物保護センターの夏期実習でした。7泊8日の合宿実習、学生は勿論のこと現役獣医師も参加するほどの人気の実習でした。故 森田正治先生が主催されていたので、通称「森田塾」です。この呼び方は僕だけでしょうか？ 塾生（夏期実習経験者）に会



写真3 対馬動物医療センター
対馬市から土地と建屋を無償で提供してもらっています。

うと少し嬉しい気分になります。君も行ったんだねえって感じですよ。

実習期間中は色々な場所に行き、色々な人の考え方や思いを知ることができました。行政の人のお話やおオカミと暮らすご夫婦のお話、裏表がなく、飾ることもなく、ありのままの現実を教えてくださいました。技術とか知識とかそういったものではなく、視野を広げるこの意味、上手く表現することができないのですが、何か考え方に変化が起きるきっかけになったような、そんな実習だったと思います。森田先生とは実習後もメールや年賀状でやり取りをいたしました。進路の相談やご報告、今の職場に決まったときも大変喜んで下さいました。森田先生の講演会に講師として呼ばれたのがよい思い出です。少しは恩返しできたかな？と勝手に思っています。どうでしょうか？森田先生。

4年生、もう夏期実習に行く余裕はありませんでした。3年生の夏、充実の夏期実習から帰った僕を、前期定期試験（7月開催）オール不可というまさかの事態が。追試、追試、持ち越し、追試。幸い留年を経験することはありませんでしたが、学年一追試を受けたかもしれません、追試代をいくら納めたことか…。勉強しなかった訳じゃないんですよ、勉強のやり方がわからなかったのです。勉強のやり方がわかったのは6年生の冬、国家試験は落ちる気がしませんでした。猛禽類医学研究所の齊藤慶輔先生のところに実習行きたかったあ。

■卒業後のお話

大学を卒業後、北里大学の研修医になりました。野生動物の獣医になりたいという夢を諦めた訳ではないのですが、それを生業にして生きていくイメージも自信も無かったからです。同級生と比べても決して優秀ではなかったし、いや寧ろ底辺で、他の人と同じようにやっても駄目だな、とは思っていました。2年間の研修医生活を終え、それなりに幅広く症例を経験し、それなりにこなせるかなという感触（イメージ）を得ることができました。ただ、悲しいかな実際はそんなに甘くない、イメージと実践は別ものです。

次のステップとして、小動物臨床の勉強・実践ができて、野生動物保護もしている動物病院に就職したいと思いました。自分が野生動物保護に関われる可能性を考えたとき、それが一番イメージしやすかった、単純な話です。多分、普通の人ならエキゾチック、特に鳥類に力を入れている病院を探すのかなと思います。実際、日本で野生動物に関わろうと思ったら圧倒的にその対象は鳥類だからです。でも、僕はその選択ができませんでした。犬猫の知識で脳の大半を占拠され、そこに鳥を加えるキャパは残されていませんでした。結果的にその選択は間違ってたと思うのですが、鳥が診れたらよかったのになあとは今でも思います。

「NPO法人どうぶつたちの病院」の存在を知ったのは研修医2年目の秋でした。偶然HPを見つけ、何となく興味を持ち、見学させてほしいと連絡を取りました。2泊3日で対馬に行き、「今



写真4 NPO どうぶつたちの病院のメンバー
一段目中央が筆者。

求人のお知らせ

現在、NPO どうぶつたちの病院では獣医師を募集しています。法人を作って下さった諸先輩の想いを受け継いで下さる方、対馬で骨を埋める覚悟をお持ちの志高き方をお待ちしております。舞台は用意したつもりです。登り、輝くことができるかどうかは貴方次第です。詳細はHP (<https://yamaneko2010.jimdo.com/>) をご覧下さい。

の僕がいる場所ではないな」とだけ思いました。院長先生は僕と同学年、それが何よりも驚きでした。

研修医を終え、埼玉の動物病院に就職しました。日中は病院獣医師として働き、休日や夜間に傷病鳥獣の治療や世話をしました。院長先生から「自由にやってよいよ」と言われていたので、非常に恵まれた環境だったと思います。ただ、独学だったのでいつまで経ってもできていない実感が得られませんでした。

30歳を迎える夏、「対馬で働いてみませんか？」というメールが突然届きました。何度かメールでやり取りしていましたが、声をかけてもらえるような関係性でもなく。ただただ驚き、そして二度とないチャンスだ、鳥は苦手だけど猫はある程度大丈夫、「今

の僕がいれる場所」、「今の僕なら行ける場所」だと思いました。あれから14年、NPO 法人どうぶつたちの病院の勤務獣医師を経て院長に、その後は理事長も兼ねることとなり、今に至ります。

■まとめ

勉強ができなくても、特技がなくても、ひよんなことから道が開けることもある。チャンスは何処に転がっているかわかりません。自力でこじ開けるもよし、誰かが作ってくれた舞台に乗っかるもよし。チャンスを逃さない、チャンスを掴める自分で居続けたいと思います。

突撃！お仕事現場拝見！

実際の仕事現場にリアルに迫るコーナー、仕事内容だけでなく気になる1日のスケジュールまで細かく紹介し、その思いまで伺います。第2回目はフィールド調査から研究まで幅広く活動している森光さんです。

※今後拝見したいお仕事現場があれば自薦他薦問わず広く募集中です！

所属 兵庫県立大学 / 兵庫県森林動物研究センター

お名前 森光由樹

1. お仕事の内容について教えてください

仕事の流れ／勤務時間／必要とされるスキルやあるとよいスキルなど／この現場で特にみてほしいポイントやぜひご紹介したいものなど

大学では、野生動物管理学を中心に講義や実習を行っています。私は、保全や管理に必要なモニタリング手法を中心に講義を担当しています。野生動物の生息状況を調査するために電波発信器を動物に装着しています。野生動物の生体捕獲の技術は保全や管理を進めるために必要不可欠な作業です。そのため学生達は、ニホンジカ、ツキノワグマ、ニホンザルなど大型野生動物の捕獲現場に同行してもらいスキルを学習してもらうこともあります。また、併任先の兵庫県森林動物研究センターでは、ツキノワグマやニホンザルなど特定鳥獣保護・管理計画に必要なモニタリング調査を行っています。主な調査の内容はGPS発信機を装着し行動圏や出没情報を収集し被害を防ぐ手法を開発しています。また、不動化した個体から血液や皮膚等を採取しています。実験室へサンプ



写真1 テレメトリー野外実習

各班でニホンザルを追跡し頭数カウントや行動を観察します。

ルを持ち帰り、血液生化学的分析、生殖ホルモンの分析、遺伝的多様性が失われていないかDNA分析を実施します。2004年頃から毎年、夏から秋にかけて、ツキノワグマの錯誤捕獲（シカやイノシシの罠にクマが誤って捕獲される）が増加しています。この時期は兵庫県森林動物研究センターのスタッフたちとクマの放獣作業の対応に追われています。これまで、国内外の研究や調査等で霊長類約2,500頭、クマ類1,250頭（東南アジアやアフリカ含）を捕獲してきました。このペースでは、まだまだ捕獲経験頭数は増えそうです。

そのほか、行政職員を対象に野生動物の管理について研修を行っています。講義や研修は、座学に加えて現場に出て経験を増やすことが技術を取得するために重要です。生体捕獲（非致命的捕獲）では麻酔銃や吹き矢をしますが、捕殺（致命的調査）では散弾銃やライフルを使用します。散弾銃は、クマやサルなどを集落や畑から追い払うために使用しますが、ヒトに危害を与える危険個体の捕獲にも使用します。もちろん自分の身を守るために必要なアイテムでもあります。複数の種類の銃を使用するため、常に使い慣れておくこと、そして事故が起こらないよう最新の注意を心がけることが重要です。

2. 現在までの経緯について

きっかけ／それに対して努力したこと大変だったこと／学生時代にしていたことなど

子供の頃にテレビで「野生の王国」というドキュメンタリー番組を見て、アフリカのサバンナで獣医師が、麻酔銃で大型野生動物を捕獲し調査している姿を見て、野生動物の仕事に憧れを持つようになりました。大学に入学してフィールド調査のスキルが無



写真2 GPS発信機を装着し放獣します。



写真3 ツキノワグマの放獣作業
管理計画に必要なモニタリング調査を実施しています。

いことに気がつき、山岳部に入部しました。しかしながら、少々登山にのめり込み過ぎてしまい、あまりフィールド調査には関係の無い岩壁や氷壁登攀に没頭してしまい、その後ヒマラヤ登山まで経験してしまいました。また、学生時代、憧れのアフリカ、ケニアやタンザニアに行き、国立公園の獣医師やレンジャーから話しを聞く機会があり、よい経験になりました。日本から来た若造相手にいろいろ親切に説明してくれましたが、当人たちは迷惑だったのでは？ と思ってもいます…。

学部卒業後は、野生動物の研究がしたかったので、大学院博士課程へ進学しニホンザルの繁殖や栄養状態の研究をしました。大学院時代は、研究に加えてニホンザルの捕獲方法、特に麻酔管理の知識と技術を身に付けました。博士過程を修了し学位取得後の進路は、保全や管理の仕事がしたかったので、迷わず、野生動物の調査会社に就職しました。入社後、すぐに長野県のサルの捕獲と電波発信器装着、行動圏調査、DNA分析を任せられ単身で長野県須坂市に借家を借りて、朝から晩まで調査とデータ分析。今思えば大変でしたが、よい思い出の長野生活でした。会社に入ってからワイルドライフマネジメント、特定鳥獣保護管理計画に必要な調査計画発案、調査実行、報告書とりまとめ、そして特に大型野生動物の捕獲、麻酔銃の扱いは大変勉強になりました。

3. 今特に取り組んでいることや抱えているプロジェクトなどあれば教えてください

研究論文や資料、グラフなど

近年の研究では、野生動物（クマやサル）を生体捕獲し、バイオロギングという手法を用いた研究を実施しています。自ら開発したバイオセンサーやGPS首輪型ビデオカメラを動物に装着し新たな手法によるデータ収集を目指しています。

まだまだ、野生動物の行動や採食物はよくわかっていないことがあります。従ってGPS首輪型ビデオカメラの映像を再生する



写真4 くくり罠による錯誤捕獲で熱中症が起こります。クマに補液しながら作業を進めます。

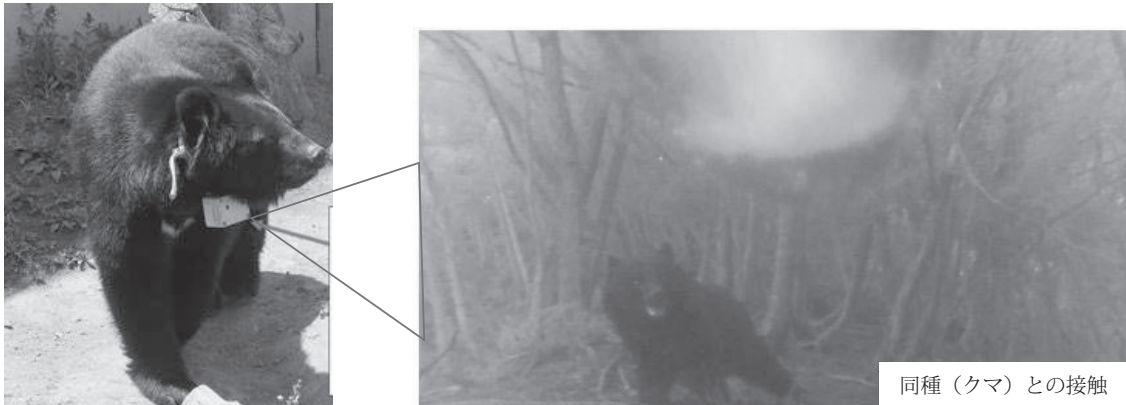


写真5 ツキノワグマへのGPS首輪型ビデオカメラの装着
右は得られた画像例。

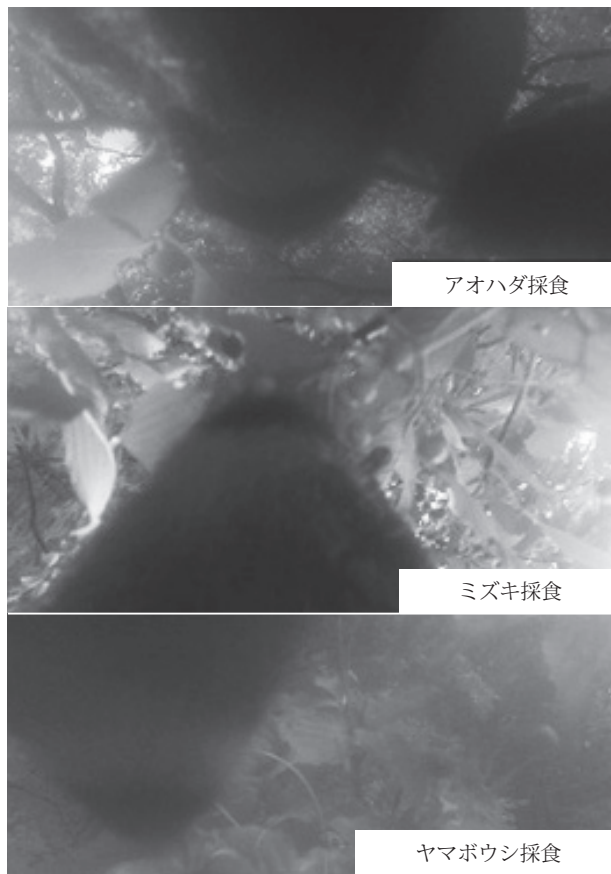


写真6 GPS首輪型ビデオカメラで得られた画像例
秋のツキノワグマの採食物の画像。液果の割合が高い。

時は、ワクワクものです。写真6は、クマの秋の採食物です。
そのほかに、ニホンザルやツキノワグマの遺伝分析による遺伝

的多様性のモニタリングを行い、地理的隔離や捕獲が与える遺伝
的多様性の減少を研究しています。

4. 一番のやりがいもしくは楽しいことなど

野生動物の研究は、想像を超えたデータを得ることがあります。研究の成果が、現場サイドに還元され、保全や管理が一步進み、農家から被害が減少し感謝された時、反対に野生動物を守ろうと思っている方々から保全分野で評価された時に達成感があります。教育現場では学生達に調査スキルを学んでもらい、卒業後も野生動物に関係する仕事に就職し、その後学会などで頑張っている姿を見ると嬉しく思います。

もちろん、捕獲現場での大変な作業を終えてからの皆での一杯も◎(☺)。

5. 一番つらいところもしくは苦勞するところなど

被害を受けている農家は、野生動物はいなくなってしまうとほしいと思っています。被害農家から研究者は愛護派と勘違いされて罵声を浴びることもあります。

「人間の生活と野生動物どちらが大切なのか？なぜ野生動物を排除し絶滅させてはダメなのか？」その反対に、増えすぎた動物やヒトに危害を与える加害個体を捕獲殺処分することもあります。その時は愛護団体からクレームを受けます。「農作物被害が発生するのは、山に餌が無いからだ。罪の無い動物の生命をないがしろにしないでほしい」保全と管理を推進させるためには、科学的データを示して感情論ではなく冷静に、それぞれの立場の人々が納得いくための調整が必要です。

6. 今後の目標

現状に甘えること無く常に新しい新技術を開発し研究することが目標です。そして、日本のワイルドライフマネジメントをもっ

と堅実なものへ進めることです。

7. 学会員のみなさんへ（特に学生会員に）ひとこと

野生動物の被害管理、いわゆるワイルドライフマネジメントにかかわる獣医師は、絶滅が危惧されている種や地域個体群（動物の集団）については、行政、被害農家を説得し、捕獲を制限し保全しなければなりません。反対に絶滅リスクが低く、被害が甚大な場合は捕獲し頭数を減少させなければなりません。前述した通り、被害農家は動物の排除を求めます。反対に動物愛護派は殺さない管理を望みます。現場ではヒトと対話し良好な関係を築く必要があります。動物だけを観察し研究だけをしていれば解決するものではありません。そのためにコミュニケーション能力がとても大切です。また野生動物管理の方針を決定する国や地方自治体の会議にも出席し意見を求められることがあります。会議では科学的データを冷静に的確に判断して、コメントする能力が求められます。

日本の野生動物の生理・生態は、まだわかっていないことが沢山あります。獣医学を学ぶ学生たちの強みは、動物の形態や生理を理解しているところです。そしてフィールドで収集された試料を実験室内に持ち込み分析できます。加えて獣医師は、動物の扱いも馴れていると思います。野生動物の調査スキルは早い段階で習得できるでしょう。海外においても、野生動物とヒトとの軋轢が増加しています。国内外、将来、野生動物管理の研究や実務への需要は増加していくと思います。ぜひ興味のある学生さんは、まずはフィールドへ行き、今現場で何が起きているのか実感して考えてみてください。

ご協力ありがとうございました！

書籍紹介



『もうひとつのキタキツネ物語』

塚田英晴 著

2022年4月
東京大学出版会 発行
287頁
定価 4,620円 (本体 4,200円+税)

井上春奈 (わんぱーくこうちアニマルランド)

実際に見たこともないのに、キツネは昔から私の好きな動物の上位に入っていた。それはマスコットキャラクターや絵本、昔話などでよく見かける、日本人には親しみ深い動物だったからであろう。しかし、なぜこんなにもなじみ深く感じるのだろうか？ 私たちは一体キツネの何を知っているのだろうか？ それらを改めて考えさせられる1冊である。

一見、映画評論を思わせるタイトルであるが、本書を読み進めていくうちに、まるで論文のような、著者の重厚な研究手記であることにも驚くだろう。序章では映画『キタキツネ物語』やテレビドラマ『北の国から』など、私たちに多大な影響を与えるメディアによって描かれた野生動物の姿は、果たして真実なのか？ という疑問が投げかけられている。第1章では、科学的知見の導入として、キツネの形態および生態的特徴を紹介している。キツネが陸生哺乳類の中でもっとも広い分布を示す種の一つであることは、優れた環境適応能力をもつことを示している。第2章では、著者の修士1年目までの研究—特定のキツネファミリーを観察し、仮定と検証を繰り返しては次の課題を見つけていく—という手法が経験に基づいて述べられている。その結果、断片的な情報の積み重ねのみでは、夜行性動物であるキツネ社会の全貌に迫るには限界があるという教訓を得ることとなる。そして第3章にて、個々のキツネファミリーから北海道のキタキツネ史へ、さらに視野を広げていく。本章では主に、年代的、地理的な個体数の増減についてその背景を見ていく。歴史的にみるキツネのさまざまな受難がいたたまれないが、その中でも強くたくましく生き抜いてきたことが伺える。第4章ではキツネが都会へ進出するようになった経緯と、もたらされた変化について述べられる。今後、日本でも野生動物とヒトとの距離感における諸問題はますます増加すると予想される。そのモデルケースとしても都市ギツネは先駆けであり、『アーバンワイルドライフ』、『都市で進化する生物たち』など、興味深いワードが並ぶ。第5章では人獣共

通感染症—エキノコックス症について、北海道内での感染事例とその疫学調査について紹介する。キツネに対する駆虫薬の野外散布実験を日本で初めて行い、その有効性を示したのが著者たちであったことにも驚いたが、本州への感染拡大など、今後の懸念を残しての結びとなった。第6章では、キツネの害獣および益獣としての側面から、ヒトとのかかわりへ。特に興味深かったものの一つがロードキル対策だ。これは野生動物全般における課題で、物理的な対策からスマホを利用したものまで、実例を紹介していく。もう一つは観光客のキツネへの餌やり問題だ。これは個人の動物観に強く基づく行為であり、キツネを個として見るか、野生動物としてみるかで、その賛否は大きく分かれるようだ。もちろん著者は野生動物側かと思いきや、単純にそう割り切れない想いも抱えている。終章ではいよいよ、著者の考えるキツネとのこれからのつきあい方が描かれる。ワンヘルスとはヒト、動物、環境の三者すべての健康、健全性は切り離せないとする考え方で、ヒトにとっての利便性を追求した介在の行き過ぎに注意し、動物や環境の健全性を常にモニタリングする必要があると述べられている。おわりに冒頭の『キタキツネ物語』へと話は戻る。著者の考える『新・キタキツネ物語』とは…ここはぜひ本書を読み切った読者の目で確かめてほしい。

かなりのボリュームである本書を読み終えて感じたのは、どの章も著者の得たこれまでの知見や苦悩がたくさんつまっていることである。分かりやすいグラフや模式図を多用し、その背景についても一つ一つ丁寧に考察している。著者が何度も述べていた“泥くさい”地道な方法こそが、フィールドでの疑問を解き明かし、ワンヘルスへつながる道であることを教えてくれる。多大な苦労も想像に難くないが、そうして謎に包まれたキツネたちのヴェールを1枚ずつはがしていくことを著者自身が楽しんでいたことも印象的だ。野生動物問題は個人によって是非の境界が非常に曖昧、かつ多方面と複雑に絡み合っている。私たちも科学的知見を基に、専門家として粘り強く解決策を模索する力を養うべきであろう。著者はそれらを今後担っていく若い研究者たちを励まし、日本でも野生動物管理の専門家が活躍することを願っている。野生動物のフィールド研究がしたい方へ、まさに十分な手引書となるのではないだろうか。



『野生動物の法獣医学：もの言わぬ死体の叫び』

浅川満彦 著

2021年12月
地人書館 発行
254頁
定価 1,980円（本体 1,800円＋税）

目次

- 第1章 なぜ牛大学に野鳥が来る？
- 第2章 どのような死があるのだろうか？
- 第3章 身近な鳥類の大量死はなぜ起こる？
- 第4章 人間活動が不運な死をもたらす
- 第5章 哺乳類と爬虫類の剖検は命がけ
- 第6章 野生動物の法獣医学とは？

外平友佳理（SALU 外平動物総合事務所）

実に痛快な筆致である。著者はいたって真面目なのに何度も笑ってしまう。そして内容についてもそこらのミステリー小説をはるかに超える面白さである。当然である。事実は小説よりも奇なり、すべて実話なのだから。

動物園などの飼育動物の診療と、個人のペットの診療の最も大きな違いの一つは「死亡解剖をするかしないか」である。解剖し死因を特定すること、それには疾病の診断や治療といった診療とは異なる知識と技術が必要とされる。特に複数の命を危険にさらす感染症、ましてや多くの来園者が訪れる動物飼育施設においては人と動物の共通感染症（以下、Zoonosis）の有無を見極めることが獣医師の重要な責務である。私自身がそうした仕事を続けてきたとはいえ、自然界の中で生きている（はずの）野生動物の死因究明の重要性とその苦勞には考えが及ばなかった。

「道端にスズメの死体が1羽あった。それだけなら、まあそういうこともあるだろう。しかし、3羽4羽、いやその先にも死体があったら…それは社会不安を引き起こす。」「考えてみてほしい。19の病原体ウイルスの自然宿主は野生コウモリ類とされている。この感染症を含め、多くの新興再興感染症が野生動物由来である。…中略。ということは、そこに横たわっている動物の死体は、感染症が原因で死んだかもしれないのだ。野生動物の死因追及をやめることは、パンデミックの根源的な部分を無視することにつながる。」そこで「欧米では野生動物にも、法医学のよう

な分野が絶対に必要である。」という信念が生まれたのだ。これこそがワンヘルス（One Health）そのものである。

第1章では酪農、と謳った大学になぜ野生動物の不審死体が集まるようになったのか、その法獣医学の舞台となった野生動物救護センターの経緯に加え筆者の研究経緯も明らかとなる。第2章では自然死と人為的な死との区別の難しさやその例について簡単に紹介し、次の章以降への投げかけとしている。

第3章からがメインである。ここからがシャーロックホームズも舌を巻くエピソードが続々と登場するのだ。「宙に浮く塩辛・スルメ」状死体」と化した大量のスズメの遺体を前にその原因について解き明かす中で、行政との軋轢やいかにマイナーな分野であるかも浮き彫りとなる。また、餌付けされたオオハクチョウの死因から人と野生動物との関係についても深掘りし、カラスが毒殺された事例などは最後まで目が離せない。農薬、鉛、医薬品など、人為的なのかそうでないのか実に複雑かつ奇妙な難題を解剖学、病理学、毒性学、獣医学を駆使して解く過程は、正真正銘の科学捜査であり、まさに法獣医学と言えよう。さらに珪藻類が血中で見つかる？ 物理学も必要!? 珍種も登場して…知っているとは知らないでは大違いであることを痛感するも未開なものも少なくない。が、著者はめげず「しかし、未来では、きっと解き明かされる」と信じ標本を保存する。

第4章は特に人間社会との軋轢によって起きた事例を取り上げる。アカエリヒレアシシギ胸腹部にあった凝血塊、オレンジ色に着色された海鳥… など。そして「謎の感染症、大発生！」とならぬよう慎重に、前章と同様に膨大な科学的知識を駆使して内容解明を行う。

第5章は筆者命がけの剖検＝冒険に引き込まれる。脅威の相手は人間!? そして未知の感染症なのだ。密猟者、死亡率の高いSFTSをはじめとした恐ろしい感染症、ダニアレルギーなどが登場する。後肢だけが突き出た死体、段ボールに紛れ込んだ野ネズミ、はたまた旧日本陸軍で使用された防寒靴の毛皮の鑑定まで!? 謎が謎を呼ぶ難解な事件の数々に、こつこつと法獣医学的なアプローチで挑む。

最終章の第6章は学問として体系付ける挑戦が続く。それはまさに本書の題名にある「野生動物の」ためだ。動物の虐待防止、福祉には動物愛護法などが当てはまり、特に野生動物には鳥獣保護法や外来生物法が適用される。それでもすべて掬い取ることができないなか、海外の流れを参考に独自の視点を入れ展開する。

さて… おりしもこの本を読み終えた直後にWAMCが閉鎖となることをご本人からお聞きした。ここを拠点に日本での法獣医学

が開けるものと確信したばかり、啞然とするとともに筆者の心中察するに余りあり、かける言葉を失った。まさに青天の霹靂、残念でならない。

法獣医学とは。「役所的には野性動物の死体は生ごみ扱い」とされる最期の声に真摯に耳を傾け、科学的に解明することで人間社会のみならず地球を救う学問ではなからうか。そうした黎明期の、類書がない挑戦的な本がこれなのだ。みなさんも、ぜひ本書を持って一緒に冒険を始めようではないか。

※併せておすすめ

『野生動物医学への挑戦－寄生虫，感染症，ワンヘルス』

浅川満彦 著

2021年6月，東京大学出版会，208頁

『ラストカルテ－法獣医学者 当麻健匠の記憶－』

浅山わかび 著

1巻 2022年3月，小学館，192頁

現在少年サンデーで連載中



『川に生きるイルカたち 増補版』

神谷敏郎 著 粕谷俊雄 解説

2022年5月（初版2004年4月）

東京大学出版会 発行

256頁

定価 4,400円（本体 4,000円＋税）

浅川満彦（酪農学園大学）

本書は淡水イルカ類のほぼ全ての種について、現地の生息状況を調査し（第1および2章）、保全（第4章）への道筋をつけた記録を縦糸に、それらイルカ類の視覚・聴覚・知能・繁殖などの比較解剖学および進化生物学的な研究（第3章）という横糸を折り込んだ織物のようだった。そして、その織物の上に、見事な意匠としてその一連の活動に関わる人々のトラブル・交渉にともなう苦勞（でも、とても楽しそうに描かれていたが）を描いたタペストリーに例えられよう。

たとえば、40代半ばまで、評者は、理解不足からハクジラ類頭蓋骨の形態の非対象性となった至近／究極要因を上手く説明できなかった。ただ、カワイルカ類が鯨類の系統関係において比較的古い系統である点は辛うじて知っていたので、この初版が出た

時、漁るように読んだのを鮮明に憶えている。期待通り、件の疑問への解答は得られた。が、それだけであった。

しかし、約18年が経過して、今一度読み返すと、そういった研究も故人となった著者の卓越した人間力があつたからこそ成されたのだと会得した。このことこそ、評者は参考にすべきであったと痛感している（間に合わないが…）。まあ、要するに、同じ本であっても、読み手の変化（この場合、老化、だが）により、奥にある別のものを感じ取ることができるということだ。そういう貴重な経験をしたのも、本書のおかげである。

さて、本書の本文は、次のような四つの章で構成されていた；第1章 雪男とカワイルカ、第2章 川に生きるイルカたち、第3章 イルカの脳に魅せられて、第4章 カワイルカとの共生をめざして。特に、第1章はキャッチーな章題に見えるだろうが、なぜ、そうなったのかはご自身で確かめてほしい。

もちろん、研究自体は進歩する。本書のような鯨類研究における約20年間の進展・変遷による完璧な補遺は、巻末「解題」にて成就された。したがって、純粋な鯨類学の情報として活用しつつ、前述した人間模様染のタペストリーを堪能してほしい。その補遺で注目された現象が、「海に本拠を持つ」イルカ類とカワイルカ類の「共生」についての論考である（解題29）。これが、実は、競争ではないかというご指摘（示唆）は、実に刺激的であった。更なる研究を期待したいところだが、カワイルカ類における深刻な状況はそれを許すかどうか。本書に触発され、研究と保全をバランスよく備えた人材の登場を切に期待したい。



『哺乳類学』

小池伸介・佐藤 淳・佐々木 基樹・江成広斗 著

2022年7月

東京大学出版会 発行

416頁

定価 4,400円（本体 4,000円＋税）

浅川満彦（酪農学園大学）

獣医学が人類にとって最も重要な産業動物および伴侶動物（以下、典型的動物）を対象に発展してきたサイエンスであることは自明である。もちろん、典型的動物は哺乳類ではあるが、だからと言って獣医学が哺乳類の全般に同じ熱量で向き合っているわけではない。生物多様性や後で述べるワンヘルスといったワードが、獣医学でも喧しい現状では、ちょっと情けない。いやいや、この場

合の「全般」とは、現生種約4,500全てと無茶を言っているわけでは断じてない。せめて、哺乳類が擁する全分類目・科の代表的属種については、典型的動物と同程度に扱ってほしいという愚痴に近い夢想である。

動物タクサの範囲に加え、純然たる応用科学の雄としての獣医学が扱う現象も非常に限られ、生態・進化など個体外の現象(究極要因)はほぼ扱わない。疾病の診療・診断・予防を扱うことを目的にした獣医学では、まず、個体内のモノゴト(至近要因)を対象にするのは、まあ、仕方がないのだろう(以上、浅川, 2021)。

しかし、である。獣医学教育モデル・コア・カリキュラム(以下、コアカリ)に野生動物学が組み込まれてしまったことに加え、ワンヘルスという自然生態系の健康にまでも視野を広げることを求められてしまった昨今、獣医学が、典型的動物の個体内にのみ留まることは難しいのではないのか。

タクサ問題ではこういう事情も加味された、年々厳格化されつつある「動物の愛護及び管理に関する法律」(以下、動物愛護管理法)では、エキゾチックペットのような典型的動物以外のタクサ群も対象とされた。そのため、法規上、獣医師は皆、動物愛護管理法の主眼の一つである虐待証明をこういった動物に対してさえ、適切に行う技量が求められているわけだ。

以上のような事態から導き出される結論の一つは、せめて哺乳類全般についてだけは強くなろう! である。動物愛護管理法では、鳥類や爬虫類も含むが(注:この法律対象のタクサは愛護動物と称される)、これら両群は、哺乳類全般を押さえてからにさせてもらおう。あまり時間的な余裕は無い。動物愛護管理法は生きていて、既に逮捕者も出ているのだから。

前置きがとても長くなってしまったが、このような切迫した状況で、本書の登場は、絶好の機会であると感じている。本書は進化・形態・生態・保全のパートに分かれ、それぞれに4つの章で構成されている。これらに先んじて序章では哺乳類学の定義が明示されている。そのサイエンスが示す内容を、本書のようにコンパクトにした努力は並々ならぬものであったはずだ。しかし、このコンパクトさが、獣医学部の現役学生や獣医師たちが自習する際の縁となる。もちろん、コンパクトであっても、内容は過不足なくバランスが取れ、これは章題だけを一瞥しても判る。中にはコアカリ野生動物学で指定された大項目も散見され、そういったモノゴトに関して有益な自習資料となる。念を押すが、野生動物学がコアカリに指定された故、齊一的に教育されないとならないのである。このニュースレターを読む学生諸君は、獣医学徒なら、

すべからく野生動物に興味を持っているはずと思い込んではいないだろうか。確かに、相当多くの学生さんが興味をお持ちなのは確かだが、その興味の度合いも濃淡があるし、興味の方向性(とにかく救護! とか、いやいや動物園で! などなど)も人それぞれである。中には、まったく関心がない方もいらっしゃる。そういう方々と授業で対峙する際、せいぜい共用試験に問われる程度の基礎情報は授け、あとは各個人の関心度に任せる、要するに自習しかあるまい。

また、コアカリではほとんど扱われない日本産在来種の種構成、生物地理、生態関係などについて豊富な図を用い丁寧に解説されている。このあたりも、「taxa by taxa 式の知識蓄積は、ご自分で。何しろ大学生なんだから」ということなのだろう。いわゆる、自然史(いや、博物誌)的なモノゴトの全てが蔑ろにされている現状で、自助努力はきついであろうに…。そもそも、在来哺乳類の進歩・分布の歴史的な過程を知らずに、歴史性を無視した存在、すなわち外来種による危険性が如何に深刻なのかを理解するのは難しいのではないのか。

形態のパートは、本学会でも活躍される佐々木教授が執筆され、これまでのコアカリ教科書とはほぼ重複しない新鮮な内容(たとえば、樹上適応やエコロケーションなど)を著されていた。ほぼ全ての目科の代表種が網羅された歯式の一覧表は、獣医歯学という資料としても重宝されよう。

もし、ボリュームを含め本書のような形式で、他の愛護動物となる爬虫類や鳥類の書籍が編まれると、自習に頼らなければならないコアカリ野生動物学の現状では、頼もしい援軍となるだろう。今後に期待したい。

引用文献

浅川満彦. 2021. 野生動物医学への挑戦-寄生虫・感染症・ワンヘルス, 196pp, 東京大学出版会, 東京.



『獣医師を目指す君たちへ』

中山裕之 著

2022年9月
東京大学出版会 発行
152頁
定価 2,970円 (本体 2,700円+税)

浅川満彦 (酪農学園大学)

前書(中山, 2019)は獣医学科に在学する学生を対象に、一方、本書は進路に迷う中高生向けとなり、刊行年の順序は逆だが、続編という体である。しかし、本書のスタイルは中山(2019)と全く異なり、それぞれの現場で活躍する獣医師に直接インタビューした内容を編んだものであった。したがって、臨場感があり、迫力のある読み物として純粋に楽しめ、獣医療現場の生々しいドキュメンタリー映像のごとき描写は獣医学徒・現役獣医師にとっても必ず何か得ることがあろう。獣医師の職域が広範なのは、我々の業界では常識であっても、身一つの獣医師自身、そのごく一部しか経験することしかできない。そして、どのような職域であっても、自分の守備範囲のみを把握しておれば事足りるということにはならないと思うし、肝心の墨守すべき場の発展性も望めない。なので、こういった異分野を仮想体験することは貴重となる。

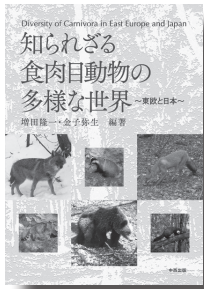
さらに、本学会々員の多くは、きっと本書の副題「ワンヘルスを実現するキャリアパス」に目が釘付けにされたはずだ。ワンヘルスとは医学・獣医学・保全生態学の学際にある部分で、それを追及するサイエンスが保全医学、一方、獣医学に軸足を置きつつ、医学・保全生態学の重なり部分を標的にするのが野生動物医学である。さらに、こちらの方がより切実で重要なのだろうが、野生動物医学関連の職域が極めて限られている(以上、浅川, 2021)。このようなことからキャリアなる語は注目されるのである。

さて、本書で紹介された職種あるいは活動分野の数は計15、そのうち、狭義の野生動物医学関連とされるのはエキゾチック動物医療、動物園動物医療および野生動物救護であった。たとえば、野生動物救護では、本学会評議員でもある黒沢信道先生の活動が活写されていた。なお、各章題にはインタビュー対象者の実名も記されていた。ご存じのように、黒沢先生は野生動物救護を職とせず、生産動物の診療の傍ら、長年、この活動をされておられる。救護活動を真剣に志向する学生諸氏は、黒沢先生の生き方

はとても参考になるはずだ。同じく本学会評議員の成島悦雄先生が、動物園動物医療の実際を紹介されていたので、こちらも園館を志向する方は必読である。なお、本書は獣医療のほぼ全域をカバーしていたが、残念なことに水族館動物医療に関しては欠落していた。何となく動物園と水族館とは類似する印象があるが、両者は全く異なる考え方と技術が存在する。したがって、改訂版では、是非、水族館獣医師のインタビューを試みていただきたい。本書では、他に生産あるいは伴侶動物医療、(生産動物であり伴侶動物でもある)馬医療分野、食肉等食品の生産・販売、保健所(公衆衛生)および家畜保健衛生所(動物衛生)、国際獣疫事務局(WOAH)のような国際機関、人や動物用の薬品の創薬や安全性研究などが紹介されていた。そして、最終的にはワンヘルスに直接・間接的に関わることが示されていたので、副題は見事に成就された。

引用文献

- 浅川満彦. 2021b. 野生動物医学への挑戦-寄生虫・感染症・ワンヘルス, 196pp, 東京大学出版会, 東京.
- 中山裕之. 2019. 獣医学を学ぶ君たちへ-人と動物の健康を守る, 168pp, 東京大学出版会, 東京.



『知られざる食肉目動物の多様な世界』

増田隆一・金子弥生 編著

2022年9月
中西出版 発行
295頁
定価 3,300円 (本体 3,000円+税)

浅川満彦 (酪農学園大学)

本書は3つのパートのもと計15の章で構成された本文に、12のコラムが補われ、日本とブルガリアを中心とした東欧に生息する食肉目哺乳類の多様な動物学・生物学や保全活動、これら動物と人類との関係などをテーマに話が展開されていた。当然ながら、なぜ、ブルガリアなのかがとても気になるところだが、そのあたりは「はじめに」に記されているように、彼の国と著者らが所属する大学間協定が契機であったという。そうすると、「あれもやりました、これもやっています」的な、いわゆる無味乾燥した報告書の類を連想させよう。だが、安心してほしい。本書はそれとは完全に異なる。科学として忠実でありつつ、物語としても完成度が高い著作である。

さて、ブルガリアであるが、その国を擁するバルカン半島は、氷期における様々な生物の避難所であった。欧州では他にイベリア半島とイタリア半島も同様な機能を担ったが、こういった避難所から氷床が後退した地域に北上、分布を拡げていったとされている。当然ながら、こういった背景からユーラシア大陸の哺乳類の系統や進化などの研究をすれば、絶好の研究フィールドの一つであることがわかる。もちろん、ユーラシア大陸と絶妙な地理的・地史的関係にあった日本列島（特に、本州陸塊）も、同じような避難所であった地域とされている。少々短絡が過ぎるかもしれないが、このように氷期の避難所における隔離と、間氷期の分散モデルの研究地域として、バルカン半島と日本列島の両地域が選択されたのは、至極当然なことであろう。

ところで、氷期の避難所であった地理的な理由は、当該地域が長期にわたり温暖で肥沃な場所であったからであろう。そうすると、人類の歴史にも関わり、現に、バルカン半島は欧州古代文化の揺籃地域にもなった。例のトラキアである。「例の」と記し、さも、昔から知っていたようなふりをしたが、実際、評者が初めて注目した契機は浦沢直樹作画『Master Keaton』であった。そのコミックでは度々トラキア文化が登場し、その連載も当該遺跡調査をする主人公の描写で閉じられていた（と思う）。本書で

もコラムでも、この文化について詳述され、また、本文の至る所で言及されていた。本書に登場する研究者は、目の前の材料のみで終始するというものではなく、相互の歴史や文化を理解しつつ、敬意を持つことが大切だと主張されている。実は評者も、1980年代を通じ、ブルガリア産小哺乳類に寄生する蠕虫類の研究者と交流があった。その当時は、インターネットは無く、国際郵便でやり取りし、その過程でいただいた大量の別刷と著作（たとえば、Genov, 1984 など）は今なお開いている。しかし、激変の90年代以降、まったく連絡が取れなくなった。近年のバルカン半島はというと、戦乱などのキナ臭い場所のイメージが刷り込まれてしまったが、本書によって少しでも前向きな印象が変わればと心から願っている。

本書で扱われた食肉目であるが、ネコ科ではヨーロッパヤマネコなどのヤマネコ類、イヌ科ではジャッカルとキツネ、イタチ科ではテンとアナグマ、クマ科のヒグマなどがクローズアップされ、分子進化と生物地理、食性と行動、そして人との軋轢などが詳述されていた。寄生虫学を専門とする評者にとって、大変ありがたいことに、条虫科条虫の系統分類について詳述されていたことである。旭川医科大学の中尾 稔 先生が著されたもので、エキノコックスのみならず、無鉤条虫などの人への適応についての解説は、獣医学徒にも、是非、一読してほしい。そうすれば、獣医寄生虫（病）学の授業も楽しく受講できるだろう。

引用文献

Genov T. 1984. *Helminths of insectivores and rodents in Bulgaria*, 348 pp, Publishing House of the Bulgarian Academy of Sciences, Sofia.



『カモフラージュ 自然に隠れる生物図鑑』

スティーブ・パーカー 著・
遠藤秀紀 日本語版監修

2022年8月
東京書籍株式会社 発行
240頁
定価 3,630円（本体 3,300円＋税）

川瀬啓祐（日立市かみね動物園）

本書の構成は、1 北アメリカ、2 中央および南アメリカ、3 ヨーロッパ、4 アフリカ、5 アジア、6 オーストラリア、7 海洋の構成となっており、それぞれの大陸（＋海洋）の個性豊かな動物たちが、美しい写真とともに紹介されている。紹介されている動物たちは昆虫に始まり、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類とかなり広く紹介されている。

その中で、個人的（単に昆虫が好きなかめかもしれないが）に一番感動するのは昆虫たちの姿だった。そのカモフラージュのための形態やその色彩の完成度は驚くほどだ。葉の葉脈に似せた翅、樹皮に似せた翅、写真であっても一瞬見失うほどだ。さらには、形態のみならず、動きまでも周りの環境に合わせ、カモフラージュする。進化の過程で得られたであろう技術に感服する。ぜひ、この本を手にしたときはそこに注目していただきたい。いつかそんな昆虫たちを現地に見に行きたいものだ。

さて、本書は書名にあるように図鑑であり、写真の割合も多い。さらに、取り扱っている種もかなり広範囲のためか、各種の説明はそこまで深くない。しかし、紹介されている動物たちのカモフラージュの技術の説明はしっかりと記載されているのでご安心を。その技術は実に多様だ。ゴーストマンティスは、獲物に見つからないようにするため、姿と動作を枯れ葉に似せている。マンゴーイナズマの幼虫は捕食者の目を欺くため、その姿は植物の葉の一部にそっくりだ。はたまた、ヒメハナグモは、捕食と身を守る、両方の手段としてその姿を利用する。多くの種が様々な技術を駆使して現代まで生き残り、これまで進化してきた。動物たちの形態や行動にはそれぞれの意味がある。それぞれが生存競争に勝つために得られた技術だ。私は動物園に勤務しているので、こうして得られた技術も展示の中に組み込んでいけたらと思う。

と、硬めにご紹介したが、私が一番言いたいのは、時には図鑑を眺めよう、ということだ。この本に紹介されている動物たちを実際に生息地で会いに行ける機会は多くはないはず…しかし、日

本の多くの動物園で飼育されているであろうメジャーな種も数多く収録されている。なんとなく眺めていると、展示や掲示物、ハンズ・オンのヒントになる要素が多々含まれていると思う。動物の魅力さをさらに引き出し伝えるために、本書を眺めるのも非常に有意義であろう。

賛助会員（順不同）



株式会社イーグレット・オフィス



文永堂出版株式会社

◆ 編集後記 ◆

編集長を引き継いで二期目に入りました。世に出す文章として論文と同様、執筆者の方のためにも誤字脱字はもちろん言い回しなどにも気をつけながら校正を行ってきました。しかし、あろうことか執筆者の名前を間違ったことやキャプションの入れ違い、などの重大なミスをしてしまい頭を下げ冷や汗かくこともありました。本当に申し訳ありませんでした。超多忙な中で快く引き受けて期日までに出してくれた執筆者の方々、さらに編集委員に心から感謝申し上げます。ホームページのリニューアルに伴ってPDFで過去のものが見れるようになりました。将来に悩む学生さんにはNo.50「教えて！先輩1 進路について」は必見ですよ！これまでも、これからも野生動物医学会を陰ながら支えられるように努力していきます。「学会員と作る学会員のためのニュースレター」を引き続きどうかよろしく願いいたします。 Y.S

本誌に掲載された内容の一部あるいは全部を無断で複製（コピー）、転載することを禁止します。

Zoo and Wildlife News

No.55 2022年12月

発行 日本野生動物医学会

〒060-0818 札幌市北区北18条西9丁目
北海道大学大学院獣医学研究院
臨床獣医科学分野 繁殖学教室内
Tel・Fax 011-706-5234
E-mail wildmed@vetmed.hokudai.ac.jp

振替 00890-3-76589

編集委員長 外平友佳理
副編集委員長 井上春奈
編集委員 渡邊有希子
伊藤圭子
田中悠介
後藤拓弥
土井寛大
橋本千尋

制作 文永堂出版株式会社